134/85

上卷

明治
46 1 9
内務

新綠

三幕六場

場割及役割

序幕

第一場　意地と誠

第二場　おつみ心

二幕

第一場　心づくし

第二場　昔の夢

大詰

第一場　秀水

第二場　心の錦

男爵家嗣子藤波綠　筑波正彌

姉藤波幸子　淺間巴

船頭源六　松島國夫

小間使たみ　福山登

書生大山　杉長太郎

飼犬ジーンく花井大輔

藝家清島淡月　加奈村花香

子爵橋維也　富士野雪峰

明治三十九年六月二十日

午後四時開幕

早蕨座

電話浅草千九百の番

三日月

（一）

小山内八千代

赤絲の燈に往來を報せる川舟の、中洲河岸は最早ほんのりと暮れ初めて、箱崎町を向ふに見る桑連送店が、博連丸への荷連びもやうやく間散になつて、若い衆が黒樓の前掛の塵を向ふへぱんと拂くと、遙かに女橋の橋の袂に低く小さな渡し小屋の、羽目を隱して大きく掲げられた早蕨座の名題看板に、花笠の電燈が靜かに淡紅色にぽつと赫く。

『よオ、今日が初日かい？』

頭ばかり艶々とハイカラに分けた廿五六が、川口橋から振りかへり樣早口に言ふと、連の小僧は落ちついて一寸考へ、

『否、六月廿日。明日つからでさア、千さん可いね、心得てるだらうね。』

『何をさ。』

『とぼけちや困りますねい、只十五錢均一。』

『ハ、、、。無論木戸錢下足料なしか。』
『川上ぢやあるまいし。』
ハ、、、、と面白さう。
『あゝ。だから今日は舞臺淡なんだ。そら見ねね、だから最前逢つたのは筑波に違ひありやしまい。』
『けれ共千さん、なんぼ新俳優だからつて、紺絣の筒袖に黒唐縮緬の帶で、頭つから煙突掃除よろしくつて風でさ、彼で俳優が聞いて呆れる。』
『つッ、話しにあらねね、彼でお前まだ、新らしい顏あんだけれども、大した腕なんだぜ何しろ早蕨座の人氣を彼奴一人で背負つて立つてるてね位なんだ。』
『へエー？』
小僧はもう其樣な事は耳に入れまいのか、一向氣の乘らぬ返事をして、馬鹿な顏で川面を眺めながら、
『親の財産當にすりや……』
と口の中に流行歌。

『俳優にあつても彼樣ゆきや幸福だけれ共……。』
千さんは尙くど〳〵と呟くのを、小僧は慣れてるのか只知らず顏に引添うて、二人は柳の角を水天宮の方へ曲つて了ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

早蕨座では大詰の稽古も漸う切れると、隈なき電燈の光を受けた舞臺に陣を拂へて騎師の片岡が四五人の頭株に圍まれ乍ら、其苦心談の花を咲かす。土間には衣裝を着けて顏をせぬ女形、顏ばかりして衣裝は着けぬ老け役などもちらほらと見ゑて、三人五人づつ埃目だつたあゆみの其方此方に腰を掛けて、今更の打合せに尙腦を惱ましてる者、一人嘯いて白を暗んじる者、中には額突き合して寄り道の相談に耽つてる者もあるけれど、大方は無駄話に笑ひ興じてる。
『筑波さんは居ますか、筑波さん。』
舞臺端から呼び立てた頭取の聲が、客なき場中にわりなくも響いて消ゐると、
『オーイ』
と返事は思ひも掛けぬ東の鶏の緋毛氈の陰に起つて、やがてもや〳〵頭の筑波顏を出す。

『其處ですか、ね出でなさりやいゝんですよ、後で髪の相談があるさうですから。』

頭取は奇麗に剃つた坊主頭の、丸顔を前へ延ばして言ふと、其儘忙はしさうに舞臺裏へ行く。

『ハ。』

筑波はしをらしい其眼に一寸向ふを見て、直ぐに立つと書扱の半分食み出した懐を武骨に掻き合せながら、素足に心地悪げもなく、あゆみを飛び〳〵に下りて來る。

花道に近く色白お瘦形が、持役の髪の飾にか紅のリボンを結びつ解いつ苦心してる側に洒落者の松島と云ふ下廻り、今しも舞臺に掛つた筑波をぢろりと見て、色白おのに後からそつと囁く。

『ねい福山、筑波君は此休の中に酷く變つたちやおいか、ね、全で大病でも煩つた樣ぢやないか、ね福山。』

福山は顔も上げずに、

『さうですか。』

『さうですかぢやないよ、ねい福山、リボンなんか後にして一寸見給へよ、ね、恐しく窶

れたもんだ、ねい一寸見給へつて事さ。』

福山は仕方なさゝうに結びかけのリボンを膝にして向ふの舞臺を見る。

髪師を遠卷に圍んだ上手の端に、角刈の腦天薄く揉み上げを剃りつけて能くも光らした顔の顎の右に、目立つやうに大きな黒子があつて、勝色地に大きく肩から袖へかけて白抜に藤の花を見せた浴衣を着た三十四五は、花井大輔と言ふ、三枚目おから、負氣なくも新劇界の松助は已かしらと自ら深く頼む處もあつて、密と顎を撫でたがる此屋の腕利。

其隣りに丈の高い後を見せて、黒絽の羽織に細かい市樂の單、一寸髪師かとも思はる、風采の、上品お貴公子肌は加奈村花香と言つて三十二三、正面に意氣な背廣を美しい肉付の肩にしつくりと着こなし、新らしい中高のカラーの下に結んだ襟飾は、濃いお納戸縮緬に白い小さな井桁の紋散らし、漆のやうな黒髪を之ばかりは不似合の角刈にして、莫を銜へながら、惜しげもなく其美貌を洒して話してるのは、三十七の座長富士野雪峯。並んで屈みなりの五十左右、小柄な取り廻し、半白お頭を五分刈にして、色の黒い顔立ちは何處か八百藏の面影があると噂の髪師の片岡、伊勢崎の蚊絣に紺獻上の角帶を締めて、手に捌髪の髪を持つ。くつ付いて隣りに細かい市松染の縮緬の着流しは、薄化粧でもしてるかと

思はれる顔色の、金縁の金眼を掛けて歯の美しい、鼻の高い口の少し大きな、内見には三十計りかとも思はれる當座の姿形淡間巴。其次ぎに少し下つて横向きの、無造作に髪を分けた黒目勝、熱情のある役にいつも成功して、其癖私の交際には酷く人好の悪い肥り肉の村尾高。其末に顎鬚の跡青々と麗はしく、柔和な面は斯かる家業には似もやらぬ座主の高野、年配未だ四十を出ず、何か黒つぽい筒袖を着てニコ〳〵と嬉しさう。今其後へ静かに立つたのが、松島の顎に差された廿四歳の筑波正彌。

正彌は何方かと言へば小柄な骨細の、變つたと聞けばさうも思はるゝ肩の寂しさ、淡黒かつた顔色も何うやら白く見にて、頬の痩けたの丈は誰が眼にも恐ろしく目に立つ。

『なアたい、變つたらう、あの窶れ方！に？彼で早蕨座の人氣者だから少し驚く。』

松島は妬に燃る眼を態と反して天井を見乍ら、其癖の身體を前後に揺ぶつて腕を組む。

『でも仮倆があるんですもの。』

福山はうつかり松島に釣られて筑波を見たのを悔むやうに、一寸眼を閉ると又新らしくリボンを弄ぐる。

『そんな事はまア可いとして、變つた事は變つたらう。』

『けれ共、そりや髪を刈つてゐい故でせう。』

『だからさ、いと物憂くて髪も刈らざりと云ふ原因でもあるんだらうよ。』

『へね？』

福山は一寸松島の顔を見て又俯向く。

『知らないのか。』

『知りませんよ。』

『ありや病氣なんだ、一種のね。』

『へね？』

『へにぢやない、しつかり聞き給へあ。』

『聞いてますよ。』

『聞いてるのかい夫で？まア可いや、そして其病氣だあ……おゝ杉君が居る、杉君は知つてるだらう、ねえ杉君、君ん處の先生は病氣なんだらう一種の。』

杉と言ふのは細面の痩せた十八九、後姿が一寸筑波に似てる處から何うかすると仕出しに出てゞも「筑波」と聲の掛かる事がある。誰の弟子と云ふ事もないけれど、酷く筑波を

慕つて他の人には隨分强情ッぱりの困り者ながら、筑波の言付ならば火にも水にもといふ正直一圖。『俳優』と言はれるのを身震ひする程に嫌ひ、「藝術家」と呼ばれるとニコ〳〵して、例も粗い紺絣の單に青目縞の袴を穿き、大きな白地の扇を差し、何か仲間中に穢おい行爲でもあると、冷笑されるのも構はずに、ずん〳〵出掛けて行つては「藝術家」を振り廻して異見をする。

最前から松島の言葉を癪に觸つてる體、つんとして、

『一向知らんですな。』

『知らん？、此奴あ可笑しい、君位筑波君に親しくして、彼の病氣を知らないのか』

『親しくしてるからつて、一々病氣をこだわつてする人もあるまい。』

『そりやさうさ、けれ共筑波君の病氣は其尋常の病氣とは譯が違ふのだ、その……一種なんだあ。』

他くまで茶かしたやうな松島の口吻に、杉は堪らず癇の虫が高ぶつて來る。

『最前から一種一種つて煩いぢやないか、ちやんと言つたら好さゝなうものだ。』

『處が言はれないんだな、只もう一種だ。』

『勝手にし給へ。』

杉は其儘脇を向くのを、

『氣が早いな、夫ぢやもう夫は止して、外の事を訊問しやうな。』

『訊問？』

『イヤ失敬、遂だ許し給へ、ねゝ？あの……何かい、此頃先生は大分或る方面へ足が向くと言ふぢやないか、ね、そんな事は無いかい。』

『或る方面とは何處ですか。』

杉は澁々ながら又問ひ返す、

『厄介な人が居る處さ。』

松島は又しても體を前後に振つて、樣ぐつたい樣に獨で笑ふ。

『はア？』

『話せないな、夫ぢやアね、君が先生の處に行つてる時に、美しい人とか、或は優しき水莖の跡とか、そんな物は舞ひ込んぢや來ないか。』

『何だい夫は。』

『分らんね、君が筑波君の處に……』
『夫は分つてる。』
夫ぢや其時にさ　女文字の手紙が來るとか、又は女夫自身が尋ねて來るとか、或は先生の口から「小あに」とか、「なに子」とか言ふ者の噂は出ないかと言ふ事さ。』
杉はもうくわつとして、
『馬鹿な事を言ふな先生にそんな……そんあ……全體君は……』
『何だい、何もさう君、腹を立てずとも密と言ひ給へ、大きな聲をすると夫こそ先生の名譽に係る、ね、兎に角筑波君は幸福な身の上だ、なア福山。』
『さうですねね。』
と此人は何處までも風に柳。
『夫が先生の病氣と何の關係があるんだ。』
『驚いたな、もう可いぢやないか、そ、そう詰め寄るあよ、否ね、何も其間に關係は無いだらうさ、然し餘り遊びが過ぎるとお體の毒さ。』
『何だ失敬な。』

氣早な杉が握りしめた拳を後からぐつと押へて、
『大分賑やかぢやね。』
杉には筑波の次の守り本尊、加奈村花香が何時の間にか後に立つて居た。

（三）

『どうも君は實に喧嘩つ早いので驚くよ。』
『だつて君は又僕の怒りつぽいのを知りつゝ遣るんだから罪が深い。』
『けれ共二人ともあんな處では遣らない方が好ござんすよ、頭取にでも聞かれると面倒ですからね。』
『夫でおくてさへ僕は加奈村さんに出られたんでハッと思つたせ。』
『そら見給へ、そんなに氣が弱い癖に鼻つ張りばかり……』
『もう〜松島君も杉君も今夜は仲好く分れ給へ、ね。』
『何も僕は杉君に怨みもなにもありやしない。』
『夫ならば尙の事。喧嘩をするのは野暮ですよ。』

『さうともさ、藝術家に似合しからぬ行爲さ。』

辛くも手を携へて歸る杉、松島を、福山に送らして加奈村は場内へ歸ると、土間には最早下廻りの人影悉く消にて、舞臺には尙ほ以前の人數に圍まれて、片岡の聲が聞ゐる。

『夫ぢや淺間さんのは分りましたね。』

片岡は手に持つた捌髪の髮を其箱へ入れやうとするのを、

『あゝ、一寸、も一度拜見。』

身を動かすと眼鏡がさらりと光つて、差し出した美しい指に之も金の印形の指輪が追ひかけるやうに人々の眼を射る。

『けれ共六つかしうござんすね、結び髪で波間へ落ちる、途端に水鳥を飛ばして其間に變つて捌髪で出る……と、此處までは如何にか自分の腕で追付きませうけれど、扨此後ですね、框を掛けて其捌髪を波のまにまに浮かせると言ふ段は是非手心のある人に餘程何して貰はなくちやね……如何でせう座長、少し贅澤の沙汰ですけれど、之は是非花井さんに願ひ度いんですが……不可ませんかしら。』

淺間は媚のある眼をぢつと花井に呉れて其眼を返して座長を見ると、富士野は銜へて居

た莨を急いで捨てゝ紛慌に指先を拭きながら、

『なに、不可ない事はあり升まい、如何です花井さん、お前さんにや望み度い位なんでせう？、上手く遣りややんやと來るんだ、聲や姿は見ないけれ共、こりや追分節よりも役は上だらうぜ。』

富士野は太い地聲で言つて花井の顏を斜めに見遣る。

『エ、、實は最前からもうもぢ〳〵してたんで、然し何うも自分から言び出すのも何ですか天狗のやうで……へゝゝゝ、私にさして下さるならばもう實に有難いんで……、矢張り研究もんですからな。』

兩手の掌を擦るのと頭を掻くのとを交る交る、嬉しさうに口を曲げて笑ふと金歯が光る。

『さうだらう？、はゝゝ、酷く嬉しさうだね、あはゝゝゝ。』

座長は譯もない事を堪らなさうに笑つて見て、

『夫ぢや淺間さん、花井君も喜んでますから何卒遣らして下さい。』

『遣つて貰さる？有難い、ではどうぞ願ひます、三幕目の第一場場割は「誘ふ水」。用なしですか。』

『エ、、エヘ、、ゆうちやんと用なしにしてあるんで……』
『たや手間しの好い！』
一同が笑ふので花井は無暗に頭を搔くと、
『花井、少しは遠慮しな、雪脂が落ちる。』
『どうも驚きます、色男は直ぐ斯う妬まれますからね。』
片岡は仕舞ひかけた鬘を又持ち直して、
『夫れで淺間さん、此鬘は其方へ、一ッ花井さんに見て貰つて下さい。』
『さうですね、では花井さんどうぞ。』
二人は一寸鬘を離れて向ひ合ふ。
『夫ぢや今度は筑波さん。』
片岡は忙しなく四邊を見廻すと、直ぐ後からぬつと顏を出して、
『はア。』
『あ、其處ですか、どうも御待ち遠さま。』
『否。』

筑波は淺間の跡へ來て棒立にある。
『たや其頭ですかい。』
片岡は筑波のもや〳〵頭を見て驚いたやうに眼を見張る。
『いゐ、刈ります、明日の朝。』
『さうですか、私やア又鬘の注文が違つたのかと思つて驚いたよ。』
『あはゝゝ。』
悠然とした筑波、性急な片岡、二人の對照が可笑しいとて又一同が笑ふ。
『夫では筑波さん、之は二幕目の毬栗鬘ですかね、此方に今一ッ寸分違はないのがあるんだけれ共此方には、そら、一寸此處に印が付いてませう、之は大詰んで例の坊主になる方だ、夫で、之は先度のとは違つて、武骨に獨で剃るんだから其積で隨分工夫はしてある積なんだよ、まア一寸見て下さい、斯うッと、髮剃の代りに何かありませんか、扇？結構、一寸借りますよ、夫でね、自分の頭を剃るんだから、自然刄物は逆に持つんだらう？、夫とも外に工夫があるかも知れないけれど……兎に角刄物を斯う當てますね、そしてお前さんが

勝天からといふ注文だからかなり苦心はしたんだよ、そら斯ういふ具合に刄を當て、向ふへ斯う、斯う、斯う、ね可い具合に剃れるだらう？、斯う〳〵』

『精密なもんですなア』

加奈村が第一に感嘆の聲を放つ側に、之も眼を離だず見詰めて居た富士野は急に笑ひ出して、

『どうも先度のには驚いたねね、何しろ彼の時のは他人に剃つて貰うんだから些とも樣子が知れないだらう、まだかしらと思つてひよつと首を上げた處が、ざら〳〵と半片の髪の毛が一處に落ちて來やアがつたから、驚いたの驚かないのつて、此奴アてつきり見物が湧く事と思つてたら、案外にさうでも無かつたから好かつたやうなもんの、ほんとにさあんなに勝を冷した初日はありやアしなかつた、あの髪にア、毎日惱まされたねね。』

と又堪らぬ樣に腹を抱へて笑ひこける、片岡は一向に澄したもので、

『ありやア別物さ、狂言が狂言だから、胸の持ちやうが違うんだね。……筑波さん夫からね、此處まで剃つた後はだれない樣につて言ふた前さんの注文通り、陰へ來て剃る心で皆一處に取れるやうになつてます、夫れからね、之が今迄の樣だと始めに髪剃を持つて陰

へ隠れる、其處で坊主髪に變つて出るんたが、今度はエア私ら筑波さんの注文から思ひついてね、一工夫凝らして一ッ髪を二樣に用ふ處が見せ度いのさ、だから、此大詰の丶方は怒りつきりで可いんで、そして此髪を剃つた後の坊主もね、今迄のはみんな奇麗な淺黄色にびか〳〵光つて塗物の樣な奴で、如何したつて實物とは見ねやしない、夫も幼さい時からの坊主ならば光つても居るだろうけれども、今度のはれ客の目の前で演るんで剃り立ても剃り立もほや〳〵といふ處なんだ、だから其處ん處も一ッ見せ度いと思つてね、常のやうな坊主の上へ見ねるか見ねぬか位薄い絹の切で工夫してね、光のないやうに又實物のやうに苦心したのさ、そして此絹は極薄い奴だから、日數の立つ中には寄りが出來るだらうと思ふけれども其奴ア搆はない、色を充分吟味してあるから、幾ら寄つても髪の毛としか見ねないやうにしてあるんだ、ねね座長苦心丈には見ねやうかねね』

『確ですよ、エー。』

片岡は得意滿面。

『少しは凝つた積だからね、ねね筑波さん如何です。』

『殆ど成功ですな。』

『殆どですか？』
と片岡は不平さうな顔をする。
『夫で此取れた奴は如何するのですか。』
『後は私が引受けるから心配はありやしないよ。』
筑波は心から嬉しさうに、
『さうですか、ィヤ有難う、殆ど滿足しました。』
『又殆んどかい？』
又一同が笑ふので片岡も苦笑ひ。
『夫では鬘は此丈でしたね、まア今度は手廻しが良いから明日は狼狽ませんよ、淺間さん其方は如何？出來ましたかい？』
『ハア、まア如何にか斯うにか、然し舞臺でなくちや、無理ですよ。』
『さうともさ。』
『ですから、明日は花井さんに少し早目に願つて、一應開場前に波布を張らして演つて見ませう。』

『さう〳〵夫が一番ですよ、夫ぢや私も其積で早く遣つて來ませう。』
『どうぞ宜敷願ひ申します。』
『好ござんす、夫では鬘を戴きませうか。ハイ大丈夫。……大分更けましたな、夫では私はた先へ御召蒙りませう、善吉。箱を積みな、夫ぢや皆樣、又明日、御免下さい。』
片岡はする丈の事を濟したのでずん〳〵歸つて行く。
『相變らず性急な人だね。』
座主は立ち勞びれた足に其邊を歩きながら言ふ。
『然し例もながら熱心なもんですな。』
と座長は眞に火を付けながら、
『殆ごと言うたのが氣に觸つたと見ますな。』
氣遣はしげに言ふ筑波が言葉を村尾が引き取つて、
『なに一寸むつとするのは彼人の癖さ、丁度君が舞臺で科のない時指の爪を噛むのと同じ事さ。はッは〳〵〳〵。』
と餘許な事を思はず言ふ。

『ふう、さう言へば成程筑波君にはさう言ふ癖があつたね、何時やらちやつた、ありや何の狂言の時であつたか、非常に其癖の活きたと思うた事があつたつけが……。』

取りなすやうに加奈村が中を取るのを、

『いや然し良い癖も餘り度々演られては鼻に付く。』

悪氣はないのだけれど、一寸強過ぎるのが此人の損な處、いやに坐が白けて一同默念となる。

『夫では皆様、私はた先へ。』

淺間が脇から不意に言つて坐を離れると人々も思ひ出したやうに家路を急ぐ。

『エ、電氣は未だ消しては不可ませんでせうか。』

取り殘されて只一人何思ふともなく立ち盡した筑波は、見廻りの爺に聲かけられて我に歸ると、引つ添うて心配さうに見詰めてる加奈村に氣が付く。

『やア、まだ居たのかい。』

『何を呆然しとる。』

『……なアに……夫よりか、君は待つて、呉れたのか？。』

『なアそんな處かな。』

『夫や失敬したな、呼んで呉れりやいゝに。』

『まアいゝさ、處で、未だ歸らんのかい？。』

『いや歸るよ。』

『夫では一處に行かうな。』

『うむ！』

二人はうち連れ立つて歩み出す。

『もし〳〵先生方、電氣はもう消しても宜しいんですかい？。』

『宜しい。』

聲から先に暗へ入つて、二人は携へて淋しく裏木戸を出ると、加奈村はふと立ち止つて、

『遂つて行き度いけれ共どうせ直さに別れるんだ、僕は此處で失敬する。』

『此處て？。』

筑波は名殘惜しさうに加奈村の顏を眺める。

『又明日からは毎日逢ふのだもの、今夜少し計り一處に歩いたつて仕様はあるまい。』

『けれ共折角待つて、呉れたのだからな。』
『そんな事は可いぢやないか、夫にもう更けとるし、明日の初日を控へとるから……。』
『さうだなア。』
『まア兎に角今夜は別れやう、夫から妙な事を言ふ樣ぢやけれど、眞直ぐに歸り給へよ。』
『眞直ぐに？』
筑波は不審しさうに帽子を上げて向うを見透す……
『いや道は曲らうけれ共……心をな。』
『心を？。』
『まア好ね、然し一寸言うて置き度いのは、君は今大切な時期なんぢやから、充分自重して貰ひ度いのだ。』
『有難う、けれども。』
『いや、君は噂の如き人物ぢやない事は僕能く知つとるよ、然し人氣と言ふものは得て人物を惡變化するものだから、能く何事にも用心して掛り給へよ。』
『あゝ、有難う、然し僕は……。』

『否、僕は君を信じとる、君も又僕を無論信じて呉れるとゝふから言うたのぢやから氣に掛けて呉れちや不可んよ、杉君の白ぢやないけれども、僕等は之でも藝術家の片割で、矢張り美の神には妬まれる方らしい、然し蹐まへ處を高くな、足場を定めて掛つたならば、なアに大抵な誘惑には負けやせぬ、例へ人は仰き見てくれずとも、自ら高いと信じて疑はなかつたら夫で可いんぢやなア筑波、然し何も斯う言うたからと言つて敢てお高く止れと言うんぢやありやせんよ、はゝゝゝ、飛んだ説法をしたな、では明日は早く來給へ、夫では失敬するよ、令妹によろしく。』
加奈村は筑波の肩に置いた其手を離すと、道を右に取つて見返りもせず据首をして靜かに別れ行く。
途端に樂屋口の開戸がギイーと閉つて、見返れば開場前の劇場の何となく物々しく、見上ぐる空に星も最う白く初夏の色に輝いて、如何した風の具合か深川八幡の十一時の鐘が幽かに聞ゆる。
筑波は解しがたい加奈村の言葉を案ずるよりも、尙其所に胸を惱ます色なき思ひに結ぼほれながら、捕へがたき其幻を捕へやうとして、心も空に只呆然と辿る濱町河岸。

(三)

『旦那様、もう四時過ぎましたがね、芝居へは未だに出でおさらおくても宜しいんですかエ、旦那様、貴君如何ぞおすつたんですか、エ、旦那様、此頃はまア何時でも眠つてばかりた出なさるぢやありませんか、ねゝ旦那様。』

正彌は一度水を潜つたらしい白地に細かい鼠紺慶の、筒袖の單物に黒めりんすの帶を片膝に短く結んで、僅かに身を斜めにした儘、清らかに疲せた其肩を高く、桑の小机に肱を持たして其居間に假寢の夢も深う、折々長く吐く息に拭き込んだ机の上が小さく曇つて、間を置いては顰める眉が如何やら苦しげに見える。

初夏の風が河岸向きの椽から密と音づれて、其處に軒近く植ゑ込んだ楓の色をさつと搖がすと窶れた頬に半分敷かれた勘亭流の大文字の背抜が、物憂げに力なくバサ〳〵と煽る。

『旦那様、四時過ぎたんでございますがねゝ。』

老婢の鐵は氣遣はしさうに又正彌の顏を覗き込む。濃い方ではないけれ共、太く延らかに丸味を持つて優しい眉のかゝりが、何となく人の氣を引く懷かしさを籠めて、引き結ん

だ薄唇は未だ憂き世の風に揉まれぬやら、色も褪せねば新しい情も動く。

『旦那様。……困るねね。』

鐵の當惑さうに首を傾けて銀簪に其櫛卷の根を掻く。

書抜が又ひら〳〵と煽つて、雨を含むか、手擦を越にて渡る風が厭に冷たい。

『旦那様、最早實際に四時過ぎなんでございますよ。夫に何ですか斯う厭に冷つこい風になりましたから、此樣な時寢てお出でおさると風邪を引きなさいますよ、ねゝ旦那様。』

鐵はもどかしげに言つて居ざり寄ると、心付いて側に置いた鐵お納戸の絽の羽織を後から正彌に引掛て遣る。袖付の多い筒袖に少し風を含んで、眞直ぐな背縫に九分の一ッ紋、五三の桐が惜しいやうに純白。

『貴君、又昨夜初日前なんで夜更しをなすつたんだね、だつて常此樣お事おあんおさりやしないぢやありませんか、ねゝ旦那様、五時にやア最早開場んぢやおいんですか、エ旦那様。』

鐵は思ひ切つて正彌の肩に手を掛けやうとする途端、烈しくきり〳〵と眉快が寄つたので仰天して身を引くと、何の事もなく又向ふ向になつてすや〳〵と綾入て了ふ。

『まア、仕様がないねね。』

呆れたと言はぬばかり、優しく小さい眼を見張つては見たものゝ、床に置く置き時計の秒は、見る間に十秒二十秒。

『旦那最早貴君……』

今更に忙てゝ又向ふ側へ行かうとする時、格子の鈴がころ〳〵と鳴つて、輕く階段を踏んで昇つて來る音、

『嬢ちやまですか？』

得たりと手を延ばすと鼻先へ、階段口をひらりと飛び上つて杉長太郎。

『何だいれ前さんかい。』

鐵は氣拔のしたやうに厭な顏をする。

『あゝ僕さ、僕なら惡いのかい。』

杉は突立つた儘で鐵を睨む。

『何も惡いつと言やしないぢやないか、何だらうまア先生の處へ來ても挨拶もしないでさ。』

『まアいゝよ、其樣な事より先生、先生は如何したんだよ。』

『旦那は眠て入らつしやらアねね。』

『眠て？困るぢやないか、座ぢや最早開ける計なのに……何處だ何處だ、階下かい？。』

『頓間だよ此人は！目の前に入らつしやるぢやないか。』

『言はなくつたつて最早見付けたよ、五時に開場のを知つて附いて乍ら困るぢやないか、座長は癇癪起して大變なんだぜ。』

『たやさうかい、夫や大變だね、夫ぢやお前さんも手傳つて起してた呉れ、私やアもう小一時間も此處に居るんだけれ共、全で他愛が無いんだもの。』

『夫ぢや此處は僕が受け持つから、婆やさんは階下へ行つて、車屋に湯でも遣つて呉れ給へ。』

『まア此樣な近い處へ車？』

『だつて座長の命令だもの、座長の車なんだよ。』

『たやさうかい、夫ぢや私は下へ行くから旦那は頼んだよ。』

『宜いよ、早く行き給へ。』

鐵は急がしげに下りて行くと、間も置かず車夫を慰勞う聲がする。
『先生、時間です。』
大聲に叫かれて、正彌は始めてびくりとして靜かに眼を開く。
『覺めましたか先生、もうあの開きますんで、座長が非常に案じて……』
正彌は尙身動きもせず、幻を追ふやうに只うつとりと眼を開いてるばかり。
『座長の車で遣つて來たんです、そして若しも病氣でゝもわるなら都合も付けなきやならんのだから、確固返事を開て來いと言ふ事で……先生何處かに惡いんですか昨日も……。』
杉は端なく松島の言葉を思ひ出したけれ共歸り際にくれ〳〵も加奈村に口止された事をも無にし難くて空しく口を默んで了ふと、
『杉さん旦那のた支度は可いかい？』
と鐵が好くもない聲を振り立てゝ階下から呼ぶ。
『先生、車が待つてますんで……。』
『む！』
正彌は漸う身を起すと又眞向ひの障子の棧に眼を付けてぢつとなる。

『先生宜しくば……』
『むゝ！』
はッとして立つと、鐵が心盡しの羽織はする〳〵と肩を落ちて、僅かに帶の結び目に止まる。
『先生、羽織が……』
恐る〳〵着せかけるのを正彌はたとなしく袖を通して、
『杉。』
『は、』
『貴樣……「夢てふものを頼みそめてし」と言ふ和歌の上の句を知つとるか。』
杉は思ひもかけぬ事を聞かれたので少し狼狽へながら、
『否、一向……』
『知らぬ？』
『ハイ。』
『あはゝゝゝ。』

取つて付けたやうに笑ふと、身を返して階段を下りる。程なく蠟塗の腰高な人力車が護謨引の輪を飛ばすばかりに筑波の門を離れると、杉は例の袴の股立ちを取つて息せき其後を追つて行く。

(四)

「午後四時半開場正五時開幕」と筆達者に濃く白粉で書いた細長い黒板の上に、も一ッ美濃を繞いで之には朱文字で「賣切」と書いた紙を粘つた早蕨座の木戸前に、寄つたわ寄つたわ男女無慮數百人、悉く無駄足の悲しさを歎つもあれば訴うるもあり、「明日！明日！」と未練も殘さず立ち歸る書生もあれば、「仕様がないねね」と泣顔になる娘もあり、「あれ程頼んで置いたのに……」と出方を怨む女房もあれば、「何にしても嬉しい」と言ふ好人物もあり、一様に表に怒つては見たものゝ、大方は入場れぬと知りながら、尙離れ難きの風情を夫と見せて居る。

茶屋々々の軒を飾つた長提燈は、紅地に白く、「新緑」と新狂言の名題を抜いて、悉く若楓の造枝を優に戯き、引き廻らした暖簾には早蕨を染めて薄緑地にぼかしてある。此處の

客は付込の定紋車花々しく、袖も襟も燕脂紫、黒髪がちら〳〵として、階上階下、薫や薔薇の香が滿ちて溢るゝ。

りん〳〵〳〵と言ふ鈴の音に先を追つて、幾十となき人に見返られつゝひた走る筑波の車を、も少しと思ふ早蕨座の手前で、あらゝと言ふ聲よりも早く必死の勢に抜いた人力車があゝ。乘たのはおとなし裝の十八九、餘り疾さに恐げづいたのか、ぽつと頰を染めて、色白の奇麗な指を透し母衣の中に確と掛けて、きつと口を結んで居たが、擦れ違ひ様に思はず筑波と顔を見合せると、筑波がはつとして狼狽へる間もなく、如何した柏子か女はニコ〳〵と其花の唇を綻いて微笑んだと思ふ間に車は前後して、女のは其左角の茶屋に轍を止めると、忽ち其家の男女に取り圍まれて姿が隱れて了ふ。

ぼうつとして筑波正彌、俄かに肩の重荷を下された様な心地、其癖厭に立ち騒ぐ胸を押へて、何時梶を下されたのか、誰が上草履を出して呉れたのか、そんな事まで一切夢中、大急ぎに狹い階段を輕々と昇つて我が室の方へ還入つて行くのを、例にない忙て様と作者部屋の古時計が當て付がましく遲れ勝の秒を運ぶ。

「遲い〳〵、もう君開いとるせ。」

『エ？』

同國の出身で先輩と言ふのを稍に、厭に兄貴振る村尾に聲かけられて正彌は驚きの眼を見張る。

『座長の處へは最早行つたのか。』

正彌は如何したのか、其樣な事も忘れて居た。

『未だなら早く行き給へ早く、如何したと言ふ遲れ方なんだ。』

『ハイ。』

正彌は今の先逢つたばかりの春の日を、思ひがけぬ冬の雲に支へられた樣、愁然と影も沈んで坐長の室に入る。

『どうも非常に遲くなりまして……』

其淸らかに今朝刈り込んだ頭を下げると鏡の前に向ふ向に顏をしてた富士野は苦々しげに振りかへつて、

『困るねい、こんなに遲れちやア……』

其儘又元の向にあつて、

『もう其樣に待つてられないから今開けましたよ、一體如何したつて言ふんだ。』

『ハイ。』

『初日から代り役も氣が利かないぢやないか、尤も來れば代るには及ばないけれども……夫でも諸人に氣を揉ました丈罪があらアね。』

『ハイ。』

『ね？一體如何したつて言ふんです。』

『其……』

『其？、』

富士野は鸚鵡がへしに言つて鏡の中から筑波の顏を見る、

『少し頭が……』

『頭が、痛んだのかい？まア好ござんす、もう出來た事は仕方がない、以來は病氣の時は病氣の時で、報して呉れないくちやア皆が氣を揉むばかしで氣の毒だからね、夫ぢや早く扮へて下さい、丁度誰も居ないから、私も根問ひはしないからねい、總ての人に病氣だつたと言ふ事にして下さい、夫ぢやア室へお歸んなさい、どうも急がしい處を引きこめちやつ

て、は、、、、、杉は？後から？さう？夫ぢや何卒急いで願ひ升よ。』

奥底のない座長の言葉に、筑波も氣を好く座を立つて歸らうとする出合頭、杉を後に登場の道の加奈村に逢ふ。

『やア昨夜は……』

『失敬、今杉君から聞いたよ、如何したんぢや。』

『どうも諸君に心配かけて……』

『まア、話は後で聞かう、早く登場て來い、待つとるから。』

『有難う。』

『杉君は借りるよ。』

『はア。』

『先生、お先へ、書抜は室へ置いときました。』

『有難う！』

其儘別れて大急ぎに白粉を溶く筑波の室の前を、

『尤物、尤物。』

『何處だい。』

『棧敷の三よ。』

うち連れて下廻り某々、座長へは忍ぶ聲、此方寄りを密々と話しあがら通る。

四人詰を五人に、十人詰を十二人にも割り込み度い程の大入の中に、此處は別世界の棧敷の三に只二人、吹きぬく涼風を後の掛簾に受けさせた衣紋淸げの女連。一人は太輪の銀杏返しにつぶ揃の珊瑚珠を掛けて黑鼈甲臺に富士と芙蓉を裏表へ蒔繪にした元祿形の櫛、前髮を少し大きく鬢を詰めて髮を丸く出した髮の好み、絹縮緬の地を濃鼠に染めて、上前に忍草を白く拔き、下前に「みだれそめにし」と風雅な文字を散らし書きの半襟深く合し、上には粗い大名縞うすた納戸の平お召を着て、帶は代赭色に淡白色入の萩の枝を染めた竹皺の絹縮、片側は同じ一布の靑竹色にして大間に白く穗薄を見せたもの、帶上は白の紋縮緬、帶止は之も白きざらの絹糸を締めて、無名指にダイヤ入の細の指輪を嵌めた左の手を前の間狹について立かけながら、相手の顏を見い〳〵何か言つて居る。年は二十三か四か、黑眼勝の眼の大きな、眉根から眉尻まではッきりとした長い眉、鼻は高い方ではないけれども口付の馬鹿に好い。一體に人好のしさうな厭味のない明るい顏。今一人は十九ばかり

抜ける程白い肌に薄く化粧つた白粉の香高く、紅を拭いた唇の艶やかに淋しく締つて、切長な涼しい眼ざしは、少し上眼にぢつと見られると、誰も自然に引よせられる力を持ち、眉は又其力を和らぐるやうに優しく太仄かに、丁度黛でゝも思ふ儘に畫たやうな形の好さ、鼻筋の通つた鼻つきの人柄な、頬の肉美しう揉上げ長く、震ひ付き度い程好い艶の黒髪は綠深うふつくりと鬢を出して、前髪を御守殿に取り、流るゝ如き髱から領脚のくつきりと際立つて、髷は之も銀杏返しの輪を大き目に洗ひ髪を水計りの梳き放しにして、三分の銀丈長の結び目を少し長目に切つて先を上へ反らして掛け、古代蝶透彫の差櫛に同じ柄を七寶にした小さな簪。濃い鼠地に見にぬる程細くて少し長目のよろけ雨絣を白と赤とで出した京お召に、薄綠色の縮緬に富士筑波の心か白と藤色とに遠山をすが縫にした半襟少し見せて、菫色地の鹽瀬に古代更紗入の破扇の手際に染めさした丸帶わざと少し巾狹に仕立つたのを燃ねたつやうな、緋の絹縮の心なき帶上と、玉子色縮緬を程よく紡けた帶止とにしつかと留めて細腰に形よく結び、小形の朱骨の扇を差して、輝く計り磨いた細い指に之は一ツの指輪もなく、二人とも濡袷の袖は薄柿に大きく破れ井桁を白抜きの四本

舞臺は今二幕目第一場が切れた處、紺綴子に千羽鶴を刺繍にした純帳花やかに垂れ初日は例ならず土間の歩みにまで鮨や茶や賣る聲賑はしく、西向きの三階の仰窓から斜めに末廣う照す夕日影に照らさるゝ微塵埃の夥しさ、人々の出入に之が五色に渦を巻く。

『ねゑ可いぢやありませんか、入らつしやいよう。』

棧敷には年上な方が忙しあげに身を捩りあがら何か促すと、若いのは俯向き加減に土間を見下しあがら、分明とした好い聲で、

『けれ共何だか極りが悪かなくて？』

『誰が？』

『私！』

『何故。』

『何故つて……』

言ひ淀んで顔を反向けると、

『あゝ！今の筑波一件？』

若いのは何も言はず幽かに頬を染めて笑ふ。

『まア、そんな事。』
と呆れたやうに身を反らして、
『夫や貴女、時の拍子ですもの、どんな人に間違へて挨拶しないとも限りやしませんよ、そんな事を一々に氣にかけてゝはとても往來は歩けないぢやありませんか。』
『エ、夫は間違へてなら一層宜いんですけれど、最前のはね、後で考へて見ると、心の中ではちやんと筑波と知つてながら、交際もないのに挨拶したんだから、餘りお轉婆な仕打ちやなかつたかと思つてねゝ、我ながら極りが悪くてしやうがないの。』
『けれ共筑波の方では何も貴女を何處の人とも、何うして挨拶したともそんな事には全で氣が付かなかつたかも知れないぢやありませんか、縱ば知つてるにしても何も筑波の室へ行くわけでもなし、樂屋へ行けば必ず筑波に逢はなくちやならぬといふ規則があるんでもなし、そんなに何も極りを悪がるには及ぶまいと私は思つてよ、詰り成丈筑波に逢はないやうに氣をつければ可いんでせう？夫丈の事なら私が骨折るから行つて下さいなねゝ、貴女蔭で計り賞めて居ないで、稀には目の前でも何とか言つてやる方が好くてよ、ね？』
『ほゝゝ。』

『ほゝゝぢやないわ、ねゝ？』
と遂には頼むやうな調子になる。

（五）

『ねゝ杉君、今先へ行つたのは山川さんのお妻さんですねゝ。』
作者部屋を右に見て二階の樂屋へ行かうとする左手の羽目に、行義よく粘つた前狂言の新聞評の切抜に對して、小形の手帳を開げて熱心に夫を寫し取つて居た福山は、其鉛筆の手を止めて作者部屋の上框に呆然腰かけて少し生びかけた顎鬚を氣にしてる杉に言葉をかけると、
『あゝさうだらう。』
と別に身も入れず又顎を擦る。
『夫から後から行つたのは何處の人です？』
『あゝ彼の人は何でも矢張り下町あたりの恐ろしい地處持の處の娘だとか姪だとか言つたよ、うゝ？名前は知らない。』

『何處で見てるんです〳〵』
『棧敷の三さ、そゝ皆が尤物々々つて騒いでるぢやないか、實に下劣極まる、深山の鄙々ぢやあるまいし、毎日々々來る毎の女を見ちや騒いで居やがる、之だからまだまだ廟の進歩などは覺束ないんだ。』
れ得意の議論になゝと漸く顏色がはつきりとして來る。
『ですけれ共、男が女の美しいのを見、女が立派な男を見て、共に心を騒がすのは美と言ふものに對する之や自然ぢやありませんか、只美しいと感じるのに何も下劣な事はありまさまい、下劣だなんて言ふ人こそ怪しいもんですよ。』
『馬鹿を言ふな、そんな愚にもつかない議論を吐かずと早く寫して了つて呉れ給へ、頭取の來ない中に拭いとかないと、又あの坊主頭、火山の如く煙を吹いて怒りだすぜ』
『大丈夫ですよ、まだ〳〵今日は道具に暇が掛るからなか〳〵遣つて來るもんですか。』
『如何して〳〵、あの坊主は口も八丁手も八丁よ、大抵他の頭取で見給へ、こんな此座の坊主のやうに日がな一日黒服を着て舞臺の世話から樂屋中の事まで働くものはありやしない、而して頭も夫丈に動かすんだからな、彼方の事に紛れて此方の事を忘れるなんて事は

決してありやしないんだ、ありや頭取的天才を持つて生れたんだねゝ。』
『何を言つてるんですねゝ、はゝゝ。』
『君こそ何をしてるんだよう、早くして呉れ給へ、何もそんな一々寫さないで、其新聞を剝がして行けば宜いぢやあいか、夫でなけりや、自分の處だけ、ちよつ〳〵と寫しとけばいゝのに。』
『さうは行きませんよ、自分の評だけ見ろなんて、杉さんも藝術家を以て自任してる人に似合はない事を言ふぢやありませんか、自分の缺點を知るのは素よりですが、他の人が用ゐて惡かつた處も又始終氣をつけて行かなくちや、少しも修業と言ふ事は出來ますまい、又他の人が用ゐて好かつたと言はれた處を用ゐても不評の時がある、之は自分の身に調和しないからで、こんな事を段々無くなるやうに氣をつけるのには諸人の藝評を讀み、又其役々の人物に對する評者の異見も讀んで見なくては、とても振られた役に扮し得る事は出來まいと思ふ、ねゝさうぢやありませんか、僕はね、此座の事ぢやないけれ共、他の座なんかで座長だとか何だとか威張つてる人でも、自分の評の處ばかり眼の色かへて見て、さて不評とあると腕の修業よりも評者の甘心を得る事ばかりに勤めて、一座の調和なんて事

は少しも念頭にかけないやうな人は、決して藝術家とは言はせない積ですよ。夫に僕等の樣な微力な者は稀々評されても、「御苦勞樣です。」とか、「よくして居たり」とか極く良い處で「目につきたり」位なんですからね、人一倍骨を折つて勤めなければ、到底死ぬ迄に名を成す事は出來まいと思ひますよ。』

『そりやさうかも知れないさ、けれ共ね、今は場合が場合だから、夫で急いだんぢやないか、僕だつて何も自分の評ばかり讀みはしないよ、然しね、君なんか夫でも毎狂言に、好かれ惡しかれ少しでも評されるんだからいゝさ、僕なんかと來たら、俳優になつて五年、失で今迄の中に只一度、あれは、何の時だつたか何でも仕出しの西洋人になつた時だ、「猿の樣だつた」と言ふ酷評を受けた切なんだもの實に情けないやね、あゝあゝ人生れて俳優の下廻りとなる勿れ！給金は少なし叱言は多し――などと言ふ奴は七里結界、僕は之でも藝術の爲には犧牲になると言ふ大覺悟があるんだぜ、今に見給へ、全國の新聞雜誌の早版座評は、杉長太郎の藝評を以つて埋めて見せるから。』

『はゝゝ是非さうして下さいよ。』

『あはゝゝゝゝ。』

折から優しい上草履の音がして、大きな龜甲中形の裕衣を袖も通さず中から兩手に襟先を持つて、肩に手拭急いで湯殿の方へ通りかゝる淺間。

『杉さん、相變らず氣焰萬丈ですね。』

言ひ捨てゝ福山の後を、

『御免！』

『之はれ邪魔です。』

道が細いので福山は平蜘蛛のやうに羽目にくつゝくと淺間も、身を斜めに摺りぬけて向ふの角を曲る。

『失敬な、男地獄！』

『叱！』

押へる間もなく、今度は反對に向ふから湯上りとも見ず襟も帶もしやんとして筑波が大きなタオルで湯氣に汗ばむ髮を、靜かに拭きながら此處へさし掛る。

『福山君、又例の寫し物ですか、何時も熱心な事ですね、杉君も切めて最少し評されるやうになると張合も出るだらうが、五年に一度では困るね。』

少し鼻にかゝる様な聲で、全で暗誦でもしてるやうな調子、柱に寄づて筑波は珍らしく晴やかに笑む。

『今も言ふとりました、實に情けないですね、此儘で行くと定命を六十年としても、五年毎では最早十度に足らぬのですもの。』

『然し夫も勉強次第で、氣を落さずに進り通したなら、まさか五年に一度など、言ふ事もありはすまい、自然に我が行く方を誤まらず。眞直ぐに進んだならきつと榮くなれるに違ひはない、けれども僕の言ふ豪いと言ふのは必ずしも名を得る事ぢやあい、例へ名は顯はれずとも、眞の價あるものを言ふのだから其積りで聞いて呉れ給へ。』

『はい。』

と杉は身に染みた返事をする。福山は後向の儘くすりと笑つて、

『筑波さん、杉君は貴君の前ぢや酷う萎げてますけれども、最前迄の氣焔と言つたらあかつ〳〵當るべからずだつたのですよ、今にねね、世界の新聞雜誌の早版座評は杉長太郎の評のみを以てしめて見せると言ふんです。』

『不可んねね。』

杉は些と大仰山にすッぱぬかれて大きに避易む。

『あはゝ、夫や壯んだつたあ、然し福山君あゞは君の氣質を能く知つて居られるから可いけれども、餘り他の人の前でそんな氣焔を吐き散らすと憎まれる、何卒福山君、君丈は杉君の氣焔を心よく聞いて呉れ給へ、人間は誰でもきつと一人の同情者を求めるもので、其を得たものは此上もない幸福を得るんですから……與ふるものは與へらるるものより幸福ありと言ふぢやありませんか、僕等も實際一人の福山君を得たいもんですねね、あは、、些と遊びに來て下さい鮨位は振舞ります。』

『有難う、何れ後程。』

『酷く暮間が延びますねね、夫ぢや失敬。』

筑波は其儘見返りもせずに階段を昇る。

『杉君は良い先生を持つてるんだねね。』

福山は羨ましげに筑波の後影を見送り乍ら言つて又鉛筆を運び始める。

『けれども僕は昨日、松島君に彼んな事を言はれたもんだから、どうも先生に對しても今迄の様に行かなくて……』

『夫は君水臭いよ、松島君は彼の通りの人物で何を言ふか分りやしないものを、そんな事で筑波さんを疎んずるなんて餘り頼もしくもないぢないか。』

『ウム、何も疎むなんて事はないけれ共、實際、近頃先生は全く變なんだ、何も松島君の言ふやうな事はありやしないけれ共、今日なんかも、家を出がけの時の顏と言つたら、夫は淋しい厭な顏色でね、最早忘れちやつたけれども、妙な分らない事を言つてね、夫や餘程變なのさ、さうかと思ふと此座へ來てからは酷く元氣が良いぢやないか、僕は不思議でしやうがないのだ。』

『でも夫やきつと病氣あんだらうから氣を付けて君は充分あの方に尽して上げなくちやならないと僕は思ふよ、あんなに君親切な而して眞眞ぐな人は珍らしいからね。』

『全く、僕だつて夫を知らない事はあいんだけれども、……。』

と杉は考へ込む。福山は漸く書き了へた手帳を懐に納ふと惜しげもなく、切抜きをびり〳〵と引き裂く。

『もう宜いのかい？』

『はア、。』

二人が力を合せて糊の跡を拭いて居ると、

『どうも御苦勞樣、ナニ糊の跡は少々殘つても搏ひませんよどうせ又直きに貼りますから。』

と頭取は額に流る〻汗を拭きあがら顯はれる、

『どうも今度の波は餘程好く出來ました、貴君方も手が明いたら行つて御覽なさい、花井さんが居ますから好い具合に敎へて呉れますよ、私も今這入つて來ましたがね、どうも大勢居るのに風が通らないから、其暑い事暑い事。』

と又忙しげに汗を拭き〳〵。

（六）

棧敷の二女は何時か富士野の室に來て話し込んで居る。

『去きませうか。』

連の菊代が些と上氣した顏を傾けてれ妻の袖を引くと、直く聞きつけて鏡の前の富士野雪峰、粗い「キ九五呂」格子の浴衣を御免蒙ひつた大肌脱、半袖の白麻の肌襦袢の胸を固く

含して、頬の邊の白粉を直して居たが振り返つて、
『マア宜しいぢやありませんか。』
と神經質らしい眼から眉のあたりを厭に六つかしく寄せて菊代の顔を見る。
『あゝほんとに行きませう、何時まで居たつて限りがないから。』
た妻も冷めた茶を啜つて立ちかゝると、
『貴女まで、あはゝ。』
と笑ひ捨てゝ、もう彼方向きに眉を引く。
『まア馬鹿にしてさ、もう〳〵ほんとに去きますよ、夫れぢやた頼みした事は好ございますね。』
と又た妻は座つて了ふ。
『好かありませんよ。』
言葉の下から反ねつける富士野に冠せて、
『何故？』
『仕方つてどうも困りますね、御兄様は御商賣柄でも遊びなさるんですから、夫を無理に

お留め申す事は出來ませんよ、夫よりか貴女が些とも家に入らつしやるやうにして御母様を助けてあ上げなすつた方が宜いぢやありませんか。』
『駄目々々、そんな事を私に言たつてつ駄目、私やね、もう小さい時から出つけてるんだから、稀に家にでも居やうものなら、夫こそ雨が降るだの風が吹くだのつて其騒ぎつたらないんだもの、だから私はそう家に居ないものとして、兄様がぢつと落ちついて嫁でも貰つて呉れないくつちやほんとに困つて了ふんだから……』
『どうも驚きましたね、貴女の姉さんなら貴女もた探しなすつたら宜いぢやありませんか。』
『眞平々々〳〵、私にそんな事が出來る位ならもう遠にた嫁に行つてらアね、兎も角も今日此座が濟んだら彼處へ行つて下さい、其上の事にするから、夫ぢや筑波さんも是非連れて來て下さいよ。』
『えゝ、ありがたうございます、夫りや私は上りますがね、筑波さんは如何で御座んすか馬鹿に堅いんだからね。』
と身を反らして、眉の油墨を指で延して居る。

『夫ぢや來ちや呉れないかね。』
『なに外の御連中とは違ひますから、行かないと事もありますさいけれども……夫ぢやア斯うおさい、筑波君の室は直き其處ですから、歸りにちよつと寄つて御出でおすつてこれ〳〵の連中だが來て呉れまいかつて、貴女から直々に言つてつて下さい、夫から私の方からも話して見ますから。』
『大變億劫なのね、心細くなつちまつた。』
『何、億劫な事はありやしません、おとなしい人ですから、此方が高飛車にさへ出なければ行くだらうと思ひます。』
『けれども、よくも知らないのに鐵面皮しいやうね。』
『夫ぢや、誰か連れて出でなさい、宮田でも、山城でも。』
『なアに行く段になれば人なんか頼まなくてもいゝけれどねね……』
『そんなら宜いぢやありませんか、何を言つてるんです、あはゝ、恥かしいんですか、之やア好い、あはゝゝゝ。』
笑ひ上戸と見にて能く笑ひ出す。

『まア馬鹿にしてる。』
た妻は口惜しさうな顔をする。
『あはッは、怒つちや不可ません、怒つちや、兎に角まア寄つて御覽なさい、夫から花井は？』
『彼奴は言はなくても造つて來らアね。』
『あはゝゝゝ。』
階下近く二丁が這入る。
『おや？』
富士野が眉根を寄せて開き咎めると、
『大分間がありました。』
と最前から待ち疲れた男衆が後で歎言がましく先つぐゝりをする。仕方なささうに、
『さうさな。』
やつと思ひ切つたやうに墨に穢れた手を拭いて、立ちあがると、
『御免下さい。』

客へ會釋と共に浴衣をはらりと脱ぐと肌も見せず、後から男衆が衣裝を着せかける。
無言の儘にた妻の後に控へた菊代がそつと、
『今度は番附にある處？』
『あゝさうあんでせうよ。』
とた妻は富士野の擧動に目も離さぬ、富士野は白地の縮緬に柑欖色の三筋縞の裾長な單
白麻の襟を重ねて濃茶の羽二重絞りの兵子帶を三重廻して後の男に渡しながら、
『今夜ア大變何處も彼處も靜かぢやねねか。』
男衆は受け取つた帶を少し右へ寄せて一ッ結び、
『へエー皆樣、此次の波に這入つてお出でなさるんで何處も大抵先生方計り御留守番だも
んですから。』
『ふゝむ、道理で……そんな事にあると、皆々たつちよこちよいで出たがるから、ち
つとも用が足りやしねね。』
『花井さん處なんぞは空あきで……』
『へエー。たゝ堅い、そんなに堅く締めちや腹が千切れて了はアな、だからた前達にやめ

つたに話もしかけられやしあい。直ぐ夢中だ！』
『へね、どうも、夫では此位で……』
とびくくものでを帶をゆるめる、
『よしく。』
富士野は結び上つた帶の兩脇へ兩手をかけて體を一搖り搖るがすと、又鏡臺の前へ座つ
て今度は頭を觸つて見て、
『一寸櫛を……や、憚り樣。』
た妻が床山から取つて渡すのを、一寸戴いて、二三度前面を撫でつけて櫛を置くと、後
の方を床山が念を入れて梳きつける。
『そんあに無暗と搔いちや痛いよ、腹が千切れるやら頭ア引搔き廻されるやら、堪つたも
んぢありやアしねね。』
腹にもあい癖に毒口を利いて、後は忘れたやうにけろりとして暫くは首を曲げて見たり
立てゝ見たり、鏡と睨めつくら、た妻は堪らず失笑して、
『まア嫌だ、何時まで眺めてるんだらう。』

『然し奇麗ですな。』

私から言つて鏡に見とれてにつと笑ふと燈の具合か、今迄知れなかつた金が糸切歯あたりで幽かに少さく光る、役名は橘 緑 也子爵家の次男坊、遊び好、容貌自慢の女たらし。

『まア、馬鹿にしてる。ねね？』

とお妻は嬉しさうに菊代の膝を叩くと、

『でも全く今度は若くたなんなさるのね。』

『イエもうちつど極りの悪い形で、あはゝ。』

と取つて付けたやうに笑つて、又鏡裏の顔に見惚れる。

『若くなるつて言へば、筑波さんの今度の技倆には實際私は驚いて了つたんだよ、如何見たつて廿歳下としか見ないのだもの、しかも髮おしの素顔同前でさ、全くあの人は役者に生れついたのですね。』

『其處に惚れましたか。』

際どい處で足を極はれて、顔色を變へるかと思へば案外平氣な顔で、

『お前さんにや叶ひません。』

と少しむつとした樣子、却つて菊代が耳朶を眞紅に染める、無臺あたり遠く近く廻りの拍子木。

『さアもうほんとに去ませう、夫ぢやあの事は何分お頼み申します、筑波さん處へは寄つて行きますから。』

『ですけれどゞうも御酒の席で御異見は困りますね。』

『構ふものか、私なら思入油を絞つてやる。』

『夫ぢや貴女に願ひませう。』

『どうも御酒の席で……』

と上手に富士野の聲色を用ふ。

『どうも貴女に逢つちや誰も往生ですよ。菊代さんが愛想を盡しますよ。』

『盡したら夫までさ、私は之でも斷念の早い方だからね。ねね菊ちやん。』

菊代は何も言はず只奇麗に微笑む、

早蕨座の主ある俳優が室の入口には、細く様を取つた細長い漆塗の小札に、各々其藝名を記して掛けてある。

富士野の室を出た二人は、其儘うす穢い大室の前を過ぎて向ふへ二三間、敎へられた角を右に折れると、其右の取付きに「魚がし」と白抜きにした紫縮緬の旗を暖簾に仕立てゝ入口に掛けた室が一ッ、人の香に暖簾がゆら〳〵浪をうつと、暗くした瓦斯の光にもなほ輝く樣に拭きこんだ二ッ銅壺を埋けた長火鉢、圓抜けに大きな鏡臺、ずつと奥に「天照皇大神宮」の幅等が、ちらりと見にて又消々。

『まア、ほんとに皆々留守なんだよ。』

お妻は一寸見たまんま過ぎやうとすると、菊代が、

『誰の室？』

『花井？向ふのが筑波のでせう？あゝさうよ、筑波と書いてあるわ。』

其處は明るく、片明りに入口の札も讀まるゝ程。

『さうねゝ。』

菊代は何うやら聲が咽喉へ詰つて出ないやうな氣がする。

『如何したの、菊ちやん。』

二三歩行き過ぎたお妻は菊代が立ち淀んだので驚いて戻つて來る。

『如何したの？。』

『私……』

『ね？』

『私、た先へ歸つてませうか。』

『何故、』

『でも……』

『何故、宜いぢやありませんか、何も何處まで來て覗きながらそんな事言ひ出さなくつたつて……ね？何故なの。』

『何故つて譯もありませんけど……』

と同じ樣な事を繰り返す。

『譯がなけりや宜いぢやありませんか。』

『で……もね……あんまり方々歩くやうで……』

『方々つて貴女、蜷めつから富士野さん處へ來て、夫から只今此處へ來たばかしちやありませんか。』

『夫はさうですけれど……』

『あゝ、夫ぢやアいゝわ、先へ行くたつて一人ぢや不可ないから、少しの間此處で待つて入らつしやい、すれば私は這入口から一寸言葉をかけて來るから、ね？夫なら好いでせう其間位は待てるでせう？』

『わゝ、其位は……けれども一處に行きませうか、』

『はゝゝ、何を言つてるのよ、夫ぢや入らつしやいな、私が附いてるんですもの、誰が何を言ふもんですか。』

『ぢや、行くわ。』

お妻は菊代の振舞に一寸不審を打つたけれど、細かしい事には關ぬ性癖の、直ぐに忘れて共に連れ立つ。

筑波の室は三尺開けた入口の左手向ふまで九尺は羽目にして、正面一間の下は壁に、上を窓にして、其處には新らしく紙を粘りかへた小障子が塡めてある。窓の下には安價らしい

長火鉢が火の氣もなく曲りなりに置いてあつて、茶の汚點だらけの猫板の上には大きな鮨皿が熊笹ばかりを殘されて淋しく載つて居る。

瓦斯の光煌々と室内を照らせど、此處も留守か靜まり返つて人の氣もない。

塲内に響拆を聞いて立ち騷ぐ見物のぞよめきが、遠く囂々と此處許までも響いて來る。

『留守？』

お妻は思はず上草履の儘片足踏み込んでさし覗く。

向ふの窓に續いて右へ這入つて一間、其處から前へ曲つて三尺、何れも削り放しの四分板で張つてあつて、其前に椽なしの小判形の鏡をかけた朱塗の小形の鏡臺を据ゑ、鏡臺の上には白粉やら紅やら油墨やら刷毛やら眉掃やら、西洋畫の具まで並べたてゝ、戴りきらぬのは疊に溢れ、溢れたのは算を亂して、綿の薄くあつた更紗模樣の座蒲團の四邊を取り卷いて居る。

三尺の羽目から續いた殘の一間は、二段に棚を釣つた衣裳棚、其處から又曲つて室の構造には似もやらぬ一間の、小奇麗な床の間、殘三尺お妻が摑つた入口の柱までは、開けば破壁、夫を隱して能く拭き込んだ出入の板戸が引いてある。

『たや？』

『？』

誰も居らぬと心ゆるして差し覗いたた妻は、はつとして流石に面を染めて後へ身を引く

『何人？』

中から錆を持つて少し尻上りの、其癖隱かな、筑波ならぬ人の聲がする。

『何人？』

『あの……』

言ひそびれて思はず後を振り向くと、菊代は何時しか立ち離れて遠くから氣味惡さうな及び腰。

中から又聲か掛る、

『何人、まアお這入り――。』

悠長な、而して親しみのある、宛然老人が孫にでも言ふ樣な口吻。

『私ですよ、今晩は。』

た妻は思ひきつて又さし覗くと、床の前に一心不亂、死んだものゝやうになつて、何や

ら雜誌やうの物に讀み耽つて居たのは、

心易くはないが、見知り越し、底意の知れぬ、人とされて、餘りた妻には好かれぬ加奈村花香、當狂言に彌命畵家淸島淡月に扮して、初日から澁がりの新劇通を唸らして居る、前場肺病患者の扮裝も洗さず、薄穢ない鬚面の儘、

『やア、貴女でしたか。』

と其癖の据首をして、心底から嬉しさうな優しい笑を湛へて、痩ては居るが巾廣な肩をゆら〳〵と立ち出づる。

『まア、御這入り。』

掌を上に、手をもつて、奥へ招ずる。

『は、有難う』

た妻は又物好きに室を覗いて見る。

床の間の壁には軸物を掛けず、其代りに下手ではなさゝうな油畵が二三枚、八呎屋仕立らしい上品な額縁に嵌められて、高低に紅白絹交の糸で不器用に下げてある、床の隅には外國物らしいのも混つた小說雜誌うづ高く、筑波が用ふ小道具であらう、擂が一本、魚籃

が一個、之は眞中にちやんと据ゑられて、既に序幕に用ひた花束は、生花と見ゐて掛花瓶に露を含み、床柱に色を彫んで、薔薇は紅く菫白ら、フリージヤが思はせぶりにぷんと薫る。

『あの……筑波……さんは？』

『生憎でした、最前下へ行かれまして……何か御用……？』

『否、別に用つて程の事ぢやありませんけれど……少し……』

加奈村はふと菊代を見つけたので我にもあらず見遣すと、菊代は忙てゝ下を向く。

『れ連か。』

『ね、ほ、、。』

『夫は失禮、どうぞ此方へ。』

加奈村が延び上つてお妻の肩越しにいふと、菊代は下を向いた儘、そつと會釋。

『否、ほ、、、筑波さんの室へ來たもんですからすつかり恥かしがつて……ほ、、、のら、待つて入らつしやい、先へ入つても道が分りませんよ、夫ぢや加奈村さん私下へ行つて見ませう、どうも御勉强の處を……下つて舞臺なんで御座いませう？』

わざとではないけれど、此人には自然言葉も改まつて氣の詰るのがた妻には辛い一ツ。

『はア、多分、裏の方でせう。』

『さよですか、どうも飛んだ御邪魔を致しました、ちつと御話しに入らしやい。』

『ありがたう、いづれ……』

『では又……』

加奈村が無言の會釋を後に受けて、お妻は大急ぎに菊代の後を追ふ。

引きちがへに此人も淚の仲間入をしたのか、頰冠りをした長太郎が、片手に胸を廣げ、片手に例の白扇を開いて、喘ぎ〳〵眞紅な顏を扇ぎながら歸つて來る。

『おゝ、もう濟んだのか。』

加奈村は未だ入口に立つた儘、

『はい、波の方は最早、最前濟ましたんですけれども、此、今開く方の道具に少し間違ひがあつたもんですから。』

『何うして？』

『否、大した事ぢやありませんけれど大道具の安公が、ちやちな事を遣りやアがつたもん

ですから……

『何をしたんぢやね。』

『何です、磯へ出しとく船を遣つてつけのい、加減にしといたもんですから、例の鐘さんが眞赤におつて、道具方でもしやうつて奴が濱邊へ上つてる船は普通何方を舳先にして位は知つてさうなもんだ、お負に此置き處は何てねんだ、舞臺つて物は道具許り好くたつて出來るもんぢやないんだ、飾り付が斷におつて、登場者の邪魔にならぬやうにするのが已達の技倆あんだ、一寸己の眼が無ねからつて、此又金番の打ち方は何だ、手前は眼が無いのか、筑波が此處へ斯う腰かけて斯う倒れるつて事ア、昨日あれ程稽古の時に注文なすつたぢやないか、斯う倒れたら斯う金番に足が引掛る事が手前には分らねねのかつて、先生、安公の體を其通りの形にさして、ぐい〳〵押しつけるんです、丁度波の方を遣つた人も多勢居りましたし、頭取も來て種々仲裁たもんですから、やつと納つたんですけれど、實に一時は冷々しました、可哀さうに安公は涙ア零してましたつけ。』

『さうぢやらう彼奴の熱心あのは良いが時々其樣いふ事を遣り居るので困る、まゝ、一時赦とした丈の事ぢやらうから直ぐに直る、夫で筑波君は？』

『矢張り切りに留めて居られましたが、何だか今日は勞れた樣だあんて、ぶら〳〵裏手の方を歩いて居られました。』

『ふむ、而して君は今女の二人連に逢ふたらう？。』

『山川さんのと最一人ですか。』

『さう、今此處へ來て何やら用があるやうぢやつたけれど居らぬので歸つた。』

『あの、うちの先生の處へ。』

『さうぢや。』

『連の美人も一緒に。』

『貴樣にも美人があるかい。』

『夫や先生、幾ら武骨の私でも、美は等しく美と感じます、但し談君の樣に直ぐに戀はせんです。』

『うふ、夫は感心ぢや……』

加奈村が何言はうとする時、

『吉めた、』ひ出した。

不意に叫んで、杉は無茶に扇で膝を打つ。
『何を？、杉君。』
『たや？、之は不可ん、只今出たと思つたら又引込んで了つた。』
杉は嘘の出損つた様な色氣なしの顔をする。
『何を言うて居る。』
『夢……夢……。』
『何。』
『夢は夢だけれど……ねえ先生、夢つて字のある歌がありますか。』
『夫や澤山あるぢやらう、歌と言つても和歌か俗謠か。』
『和歌あんです、下の句です。』
『妙な事を言ひ出しさね。夢の通路……か。』
『もつと終ひまで言つて見て下さい。』
『夢の通路人目よくらむ。』
『違ひます、何でも夢を頼むと言ふやうあんでした。』

『うむ、夫ては違ふかも知れんが、夢てふものを……。』
『夫です〳〵、夢てふものを頼み？、何でしたつけ。』
『頼みそめて……し、とか、きとか言うた。』
『夢てふものを頼みそめてき！、夫です、先生はよく御存じですね、而して其上の句は何と言ふんですか。』
『上の句？聞いて如何する。』
『如何するんでもありませんが、今日家の先生が此座へ出がけに妙な事を言つたと申したのは夫なんです、そして只今も舞臺を歩きながら、誰も居あいと思つて又夫を繰り返して居られました、ですから若しや心配あ事でも其歌に含んでるんぢやありませんか、夫で聞き度いんです。』
『うふゝ筑波君は君を喧豚うたんぢやよ。』
『否、うちの先生に限つてそんな事はありませんし、しかも獨言にまで……』
『うむ、夫ぢやア近くに其和歌のある集でも讀んだので、夫で口癖にあつたのぢやらう。』
『けれども、僕、氣にかゝりますから……。』

『貴様はなか〳〵心配性ぢやねね、何も氣にかけるやうな歌ぢやない、ちつと氣障な歌で君などが聞いたら腹が立つかも知れん。』

『そんな、厭な歌なんですか。』

『名句には遮ひなからうけれど、ちと厭味ぢや、君が夫を聞いて若し他人に話すやうな場合があると、分らぬ奴などは筑波君を卑しめぬとも限らぬ。』

『卑しい歌なんですか。』

『さう言うても困る、ま、ま、兎に角、心配するやうなものでもなし、又先生の爲を思ふならば、そんな事は聞かぬ方が宜い。』

『聞いて置かなくても大丈夫ですか、其方が先生の爲てすか。』

『さうとも、心配な事ならば君が言はずとも僕が敎へる。』

杉は始めて安堵したやうに、

『夫ならば聞かなくとも可いです、又他人にも聞かせはせんです、若しうちの先生が誤解でもされてはなりませんから。』

『さうぢや、能く氣が付いた、筑波君の此頃の樣子の變つた事に就いても、餘り他人に言

ふちやならんよ、趣味が卑い、臆測の強い、而して嫉妬心の他まで深い劇道じや、隨分自身は明るい道を歩つてる積でも、先方から前へ立つて陰を作つて暗くして了うのぢやから、普通以上の力を以つて之を防がなくては忽ちに、惡くの人に誤解せられて了ふ。然し筑波君だつて君だつて、劇の位置を高くする爲には甘んじて犧牲になると言ふ覺悟がある んぢやないか。もつと心を大きく持たにやならん、筑波には僕が向れ言ふから、君などが詰らぬ心配するにや及ばん、可いか、分つたな、分つたら可い、僕が付いとるぢやないか そんなに心配するなよ。』

語尾は例の老人口調、優しく言つてそつと杉の肩を打つ。

杉はしをらしく俯向いて、

『どうか、うちの先生を見捨てないで下さい。』

『うふ、大丈夫ぢやよ。夫に何ぢやないか、筑波君も今日は酷く血色が好いぢやないか、きつと芝居が休だつたので、胃病だつたんじやらう。』

『さうかも知れません。』

『さうとして安心して居給へ、夫ではもう留守番は宜いな。』

杉は急に改まつて、

『どうも有難うございました。うちの先生からも宜しく。』

と心づいてやつと頬冠りを取る。

『では失敬、後に又來る。』

『何卒。』

加奈村は杉に別れて廊下へ出ると、思はず知らず打ち微笑む。

うたゝ寢に戀しき人を見てしより
夢てふものをたのみそめてき。

確か古今集の中にある小町の和歌。

さては筑波は戀故の褄れか、什麼生、何處の誰人に？、

加奈村は我が室にも寄らず、物思ひつゝ三階の階段を下る。

(八)

之より先加奈村に別れたれ妻菊代は、急き立てられるやうな柏子木の音に、足を早めて三階の下り口にさし掛ると、折から波布に這入つて居た一連が、舞臺の騒ぎも靜まつたので、次の幕までの息休みに大室へ歸るのであらう、中には本式に波服を着て同じ切の頭布を冠つたのもあるけれど、多くはすつとこ冠り頬冠り、風體の惡いのを自慢げに、どやどやと上り口に押しよせて、故意か自然か此方が控へれば向ふも控へ、思ひきつて下りやうとすれば、向ふも意地惡く階段に足をかけて、わざと間をあけては一人二人づつ上つて來る。しかも上つて來た人達は、道の狹い故もあらうけれど、擦々に寄ては二女をぢろ〳〵と見て過ぎる。

菊代は消にも丁ひたさう、れ妻も餘りの人の惡さに、腹を立てゝ再び後へ戻らうとすれば、一旦前を過ぎた人々が、急ぎもやらず二階中を廊下とんび。

『仕樣がないのねに、控へてるから付け上るのよ、切が無いから構はずに下りませうか。』

『さうねに。』

二人が切迫つまつてうつと囁き合ふ時。

『やア未だ此處にお出でゝしたか。』

聲を先に又はしなくも加奈村の姿。

『まア好い處へ、今ね押し込められて了つて如何しやうかと思つてたんですよ。』
加奈村は靜かに一順ずつと見渡して、
『之はお困りでせう、一寸失敬。』
二女の脇を出て、下り口の手擦に片手をかけると丈の高いのをぢつと俯向け、
『おい〳〵諸君、氣の毒だが上るのを暫時待つて貰へまいか、明るい處から來られたんぢやから、多分見ねんのぢやらうと思ふが、此處に最前から御婦人が待つて居られるんぢやよ、別に急ぐ旅路でもあるまい、少し控へても構ふまいと思ふが？』
と皮肉な言方。
「尤物、〳〵」と傳へて面白半分、階下では今、上り殘りの若干人が、彌次馬をさへ混せて珠數つなぎになつて上らうとする處を、樂屋中でも親切者から何處にか若い處のある加奈村に聲を掛けられたので、譯もなくずる〳〵押しに後戻りをする。
『さア、御出でなさりませ。』
『まア何ンも御世話樣でした、まア貴君から。』
「ま、ま、お出で——。』

『否、ほんとに御構ひなく……』
『氣味が惡るござんすから……』
と菊代までが頼むやうに言ふので、
『ふ、ふ、では御言葉ぢや、失敬します。』
一寸大樣に首を下げると、身輕く一直線に下りて其の儘暗い處を何處へか行つて了ふ。
嬉しやと二人は其跡を宛然深山の雪中に連れの足跡を認めたやう、懷かしく辿つてやう〳〵舞臺裏に出ると、始めて我に歸つて、四邊を見廻す。右手左手、何れもさして手廣くもなき舞臺脇に、秩序もあく、大道具を立てかけた凄まじさ、之ではいかに名手が書割の畫の具とて、いかに道具方が苦心した立木の刳抜とて、千秋樂までに瑕の付かぬ筈はあるまいと思はせる。
前ある半圓の舞臺には、早くも一面淺の雪景、見事に飾られて、淺黄に過ぎず靑きに過ぎず、座主が自慢の新調と聞く此場の波布が、稽古を濟した爲か片隅に山の如く積まれて居て、此處には筑波らしい姿もなく、只其波布の陰に十八丸計りかとも思はれる一見乞食の如き少年が、後向に靜かにすや〳〵と淋しく寢て居るばかし。

『嘘？、居やしない。』
お妻が言ふのを、
『一寸』
と押へて、菊代はたづ〳〵。
『御覽あさい、何うしたんでせう、誰でせう。』
聲を小めて寢てるのを指さすと、やつと心付いて仰山に、
『ま呆れつちまうねに、何處の人だらう、きつと波に這入るのに近處の子でも頼んだのかもしれないのね。』
『さうねに、けれども……』
『隨分穢ないのね、後まで用なしだなんと思つて……圖々しい事。』
『誰か起すといゝのねに。』
『こんな人は用のない時起したつて迎も駄目よ、まア好いわ、今に叱られるから……夫よかも筑波には困つちまうのね、兎に角今度は表の方へ行つて見ませう。何だか大變お仕がかりさしてどうも誠に濟みません。』

『まア厭な事を……』
菊代がぢろりと見た流目の美しさ。つくろはぬ自然なれば、彼の歌姫が男の子の肉を刺す痛さも無く、諂諛ずして親しみを乞ひ親しみなりて慎ましげで、品あれど賢しげならず内に凛たる面影ありて、如何してあんな仇つぽい風がと、女のお妻さへ呆然見惚れる事がある。
表舞臺は裏に引きかへた明るさ賑やかさ。舞臺面は遠くばらばら松、斜に浪打際を見せた背景に、ずつと下手で砂濱に上げた漁船が一艘。今しも上手の空地に立つて、脚半穿き突かけ草履、片目の道具方に、波に洗はれた色の施行の卒塔婆を待たして、彼方此方に立てさして塡面を見乍ら差圖してるのは、いほじり巻の束ね髪、た納戸無地の浴衣の片褄を上げて、巾狹な帶を前に結び、やけな横佛、素足に白縮緬の二布を見せ、ちよと腕まくり小股の切れ上つた傳法肌、小意氣な好たらしい廿五六、是は思ひきや淺間巴の登場振り！
『此處にも居ない。』
出怯れた菊代を振り返つて、お妻の聲がつひ筒抜けると。油斷のない淺間は、例の眼にちらとお妻を見て、褄引き下しつかつかと寄つて來る。

『まアた妻さんぢやございませんか、誠に暫くでございました事。』
『ま、誰だと思つてたられ前さんかい、恐しく最前はハイカラだつたから、實際にた前さんにも似合はない、之たから誰に限らず上方へは遺り度くないつて言つてたんだよ。』
『どうも有難う存じます、もう何ですが東京は久しぶりだもんですから、つい上方の辯なんかゝ出て了つて、さぞねね、まだるつこしく入らつしやるだらうと思ふんですよ。』
『でも二幕目からはお前さんの御得意の伎倆で演るのだから結構さ。』
『如何ですかしら？、お妻さんは相變らず口が巧うございますね。』
と段々馴れて來る。
『誰が！お前さんおんかにた世辭を言ふものかねゑ。』
『どうも恐れ入りました、時にお兄様は相變らず御盛んださうで？』
『ねゝねゝもう、盛ん過ぎて弱つて了ふのさ。』
『結構ぢやございませんか。』
狼狽してた道具方が、
『先生如何でせう、一層斯う眞中にしては。』と當ずつぱうを言つて急き立てると、

『左様さね、却つて好いかも知れおい、夫では兎に角其處へ打つといて貰はう、何れ又筑波さんにも見て貰うんだから、一ッぐつと斜げて打付けといて下さい、馬鹿にしてやアがらア、海から風が來るんだから上手の方へさ、さう〳〵夫で上等々々。』
直ぐ向き直つて、
『御母様も御達者て？』
『ねゝ未だ生きてますよ。』
お妻は始終淺間を茶にしてる調子、委細搆はず四邊を見るけれども、尋ぬる筑波は影も差さぬ。
『何は？つ……』
……く、ば、と言ひかけるのを危く元へ飲み込んで了ふ。仔細あつて淺間は山川の爲に遠ざけられて、折の好い上方行の後は久しく顔を合せないのをしほに、今夜の一座にも此人は抜かさうと言ふ相談があるから迂濶に此人に筑波の在處は聞かれぬ。
『何は……金公は矢張り一處なのかい？』
と早速に思ひかへして其男樂の消息を聞く。

『否、あの野郎は憎らしい事をいたしましてね……』
『あゝ、さう〳〵、聞いた〳〵、飛んだ事だったね。』
お妻は話が長くありさうなので、
『少し急ぐから……後に話しにれ出でよ。』
言ひ捨てゝ素氣なく淺間を置き去りに、片陰に控へて居た菊代の手を取つて、大急ぎに又裏手へ出て見ると、不思議な事！、何時の間にか此處に來て居た加奈村が、最前見た年若な乞食の如き人物と、親しさうに言葉を交して居る。
『？』
言ひ合したやうに眼を見合した二人の女は、思ひがけぬさにひたと足を留めて、物も言はず二人の樣子を見詰めて居る。
二人の話は丁度切れたと見にて、立離れて若いのは樂屋口の方へ行かうとする、途端に加奈村が何氣なく二女の方を向くと、
『やア此處でしたか。』
俄かに忙てたやうに二三歩少年の後を追つて、

『たい〳〵行かずとも可い、君の御客樣は此處にた出でぢや。』
客席俄かに物騒がしく、割たるが如き「開けろ、開けろ」の聲、柏手の音、下足札に歩みを叩く響き。

(九)

『夫でもねい、まさかあの人が筑波とは思はなかつたから、つひあんな事を言つて、何ですか極りが惡くなつて了つたんですもの。』
『夫は私だつて同じ事ぢやありませんか、夫を貴女つてば自分一人何時の間にか拔けて此樣な處で人形なんか買つてるんですもの、隨分ぢやありませんか。』
花を欺く運動場の小間物店の前に、菊代を捉へてお妻は怨み顏。
『ですから詫るわ、ね、いゝでせう？』
菊代は、ちよん髷、八の字眉の小人形を持つた兩手を胸に置いた儘、戯れに頭を下げて笑顏になる。
『貴女にさう言はれては叶はない、夫ではまア許しませうね、けれども實に私、筑波の變

つたのには驚いてよ。
『ほんとにねえ、鬘から風つきから、如何見ても扮つてるのだとは思へなかつた事ねえ。』
『扮つてるんだと思や、あんな穢い何のつて言ふんぢやなかつたんですよ。』
『さうねえ、而して、あの御言傳はなすつたの。』
『處が駄目。』
『行かれないんですつて？』
『否さうぢやないの、そら、前に富士野さんの處で、堅い人だの何のつて聞かされたでせう？ ですから堅いのは結構だけれど、夫でも若し斷られたら如何しやうと思つてた處へ、あんな思ひも掛けぬ風をして居られたもんだから、すつかり何だか狼狽いて了つてねえ、お負に側に氣の詰る人が聞いてるんでせう？ 如何しても今夜一杯上げ度いからなんて事は出なくなつて了つて、仕方がないから、只ね、兄が大變貴君に御眼に掛りたがつてますから、何卒御閑の時に報して戴きたいつて、好い加減な事を言つて來て了つたのよ、だから後で花井でも賴んで言はせやうかと思ふんですよ……』
『ほヽヽ、夫ぢや骨を折つて探し廻つた甲斐はなかつたのねえ。』

『まアそんなものよ。』
ほヽヽと二女は思はず高聲に笑つて、
『貴女、夫で買物はお濟？』
『えヽ、もう好ござんす。』
菊代は人形の首丈出して懷へ入れる。
お妻はふと何か心付いたやうに幕の後の透間から場内を覗いて、
『まア、厭に靜かになつたと思つたら、頭取が何か口上を言つてるのよ。』
『さう？ 餘り幕合が延びたからでせう。』
『えヽ！ 夫では最早開幕くでせうから中へ行きませうか。』
菊代は最一度懷かしげに小間物店を振り返つて、お妻の袖に縋るやうにして立ち直る鼻許へ、疾風の如く走けて來た一人の男、危くお妻に衝突らうとして輕く突立ち、
『おつと物騷千萬。』
きよとんとして、

『どうも失禮、おや？』
首を上げる柏子にぽんと手を打つて、
『よッ、之はお揃ひで……』
とは言つたものゝ、菊代は餘り好く知らぬ顔だつたので間の惡さうに額を撫でた。男は彼の松助張りの花井大輔。
『何だらうまア忙て臭つて、何處へ行くのさ。』
『エヘヽ、實は今座長の所で、今夜の御連中の事を聞いたもんですから、ちよつとさる處へ電話を掛けやうつてんで……』
『何のさ。』
『エヘヽ、曰く天機もらす可からずですかあ。』
『生意氣な事を御言ひでないよ、差し支へがあるから無理しなくても可いんですよ。』
『イヱ、如何いたして、決してさう言ふ筋ぢやないんで……』
『大丈夫かい。』
『ねヽ受合つてんで、夫から何は、あの人にはもう御話しになりましたんで。』

『つ、かい？』
『へゐ！』
『夫がね、逢つた事は逢つたんだけれども、言はれなくなつちまつたのさ。』
『へゝ、如何してね？』
『なアに譯も何にもないのさ、只言ひ忘れて了つたから、お前さんに頼まうと思つてた處なのさ』
『困りますねゐ。』
『困りやしないよ、お前さん宜しく遣つとくんなさいよ。』
『ですけれども、夫や好うございますが、餘り面白かありませんせ。』
と妙に首を捻つて横目づかひ。
『處がねゐ……』
とお妻は俄かに聲をひそめて、
『……之のねゐ……。』
と平手で横に咽の邊を仕切つて、

……かの字が來る筈あんだからさ。』

『ヘッ？』

花井は飛上つて、

『面白いッ！』

『だらう？』

『ですとも！夫ぢやまんまと首尾よくつて處を御目に掛けます。』

『夫から例の、あの字には沙汰あしだよ。』

『夫はもう。』

トント胸を打つて、

『夫んは御免、何れ後程。』

そか〳〵人集りのした中を、如才なく走けぬけて表の茶屋へ行く。

『菊ちやん？』

菊代は何時の間にかお妻を離れて、場内の口上を聞いて居る。

『又！、貴女は薄情だよ。』

『堪忍して頂戴、だつて人が集るんですもの。』

『意氣地なしね。』

『全くなの。』

菊代は便りなげにお妻の顔を見る。

同じ運動場のとある寫眞店に、前興行の狂言畫端書を捜つて居た手を浮かと止めて菊代が終始の運動にぢつと見入つたのは、きりゝと痩せて色の白い、眞黑な髪を厭味のない五分刈にして、揉上げから顎へかけて一面の薄髯、金縁の近眼鏡をかけて丈が抜きんでて高く鼻筋の通つた顔立ちに、一點の惡相なき、廿八歳、文學士間瀬康太郎。

舞臺では漸くとめを打つ。

(十)

ズボラ部屋不精部屋の名稱ありがたき加奈村の室は、眞中に据ゑた鏡臺の抽斗の開けつ放しは愚か、舞臺で差した儘の傘も閉めず、間の隅に蛇の目を光らし、其中から化けて出たやうな古浴衣も、ぶ裝屋が畳んで納つてくれる迄は、柱の釘にあだし腐れ縁を歎く。五

六枚重ねた客蒲團が頽れをうつて辷りこけた上に、れ茶盌は斜に茶托を覆して、懐中物は足袋と共に床の間に安置され、衣裝棚には何やら大きな新聞包が飾られて、火鉢の上の鐵瓶に手拭が置せてあるやら、天井に玩弄の各國國旗が下げてあるやら。

其中に悠然と膝を抱いた加奈村は、眞向ひに之は四角く座した筑波に對して、紅皿の糸底に「敗島」の灰を拂ふと、落着いて話の後を續ける。

『で、僕は君が今日どあつて其樣いふ酒席へ行かふか行くまいかと迷ひ出したのに就いては大いに不審を抱く。——が、君も今迄は相談もせず——處か、寧ろ僕には隱す位にして一切た座敗と言ふた座敗を斷つて居つた事も知つて居るから、僕も別段差し出て意見も述べて見た事はあいが、何時か斯う言ふ相談にあづかる日があらうとは僕も豫期して居つたのぢやから、僕の思ふて居る事丈は言うて見やう、然し、行く、行かぬと言ふ事は、問題つても構はぬと言ふ位の覺悟でもつてから、矢張り今迄通り獨斷で遣つて貰ひ度いのじや。僕は君も知つてる通り、料理屋でも待合でも呼ばれては必ず行く——尤も待合へはまだ幸か不幸か招ばれた事はないが——要するに、胸の締皮さへ確だつたらば、人間一個、さう〳〵無暗に墮落するものぢやないと信じとるのじや。危きに近よらぬ君子はありや弱

虫よ。又、君は若し自分にさう言う行爲のあつたのを聞いたら、ある部分の人の信用が落ちるかも知れぬと言うたけれど、そんな一度や二度の茶屋小屋遣入りに信用を落すやうあ人達は決して心からの贔負ではなくて「彼奴も今に」と思うて君の墮落を待つとる奴なんぢや。未だ君は山川と言ふ人物は餘りに我々を藝人視しとるからと言うた、然しさう言ふ人物の處へは進んで行つて、暗に向ふを取りひしいで貰はなくては困るぢやあいか、此頃ちよい〳〵座長の室などへ見える學生あどか僕は劇を崇拜するあど言うて怪しい外國語を振り廻して、何の彼のと僕等を煽動てるけれど、決して彼等は僕等の友ぢやあいのぢやよ。理想に適うた人があいと言ふてる間に、誰でも可いから、適當な人を捕へて理想化せしめた方が幾ら利口か知れた話しぢやないか、夫や此廣い世の中ぢやもの、隣分氣に入らぬ人も多い、何時やらぢやつた、何やら言ふ演劇雜誌に富士野君が、演劇は壹個人の物ではなくて社會の物ぢやと書いたのは僕等も贊成であつて、僕は又個人としての行もさうなつて欲しいのじや、君あどの藝は一度舞臺へ出ててはゝ滿都の子女を恍惚たらしひけれど、私としての行爲は餘り一方に偏して居りやせぬかと思ふ、社會の爲に微力あがらも劇を以つて盡すと言ふのあらば、今迄のやうな偏屈主義では到底も廣く知ると言ふ事は出來まいど

思ふがね、社會の人たらずば社會の人を寫す事が出來まいが、なア筑波。

加奈村は言ひ了へて筑波の顏をぢつと見詰める。

舞臺には今波の太鼓のといろと聞えて、何かは知らず男女の烈しく爭ふ白が聞える。

筑波は斯う言ふ筈ではおかつたので、思はず意外だと言ふ面持をする。

山川の席へ行き度い？何故行き度くなつたらう、夫は分らぬ然し何だかむづ〳〵するやうに行き度い、花井君の話ではお妻さんも連の婦人も行かれるので、決してみだらな席ではないと言つた。ふつとれ妻さんの連れの婦人とある廊下で行き合つて擦れ違ふ處が眼に浮ぶ、雙方ともに振り返りはせぬのだけれど、れ互に顏色が急に沈んで立ち止つて居る——

——と思ふと押しつけられるやうな胸の支へるやうな厭な氣持がし出す、今度は最前の舞臺裏の處がまざ〳〵と心に浮ぶ。加奈村君に呼ばれて振り返ると、山川の妹の隣りにあの婦人が惡く取りすまして立つて居るのが直ぐ眼に這入る、同時にむか〳〵と腹が立つ、半分夢中でれ妻さんに挨拶して顏を上げると彼の人の姿が見ねあい、はつと思ふと出しぬかれた樣な氣がして口惜しくもあり詰らなくもあり、情けない殘念だと思はれて、れ妻が言ふ事が全で分らなくなる、れ妻さんが向ふへ行く迄彼の人の姿は見ねあかつた。暫く呆然！

——全く呆然して居た——すると花井君が來てれ妻さんの言傳だと言ふ今夜の招待。堅氣な婦人の混る席だと言つた、お妻さんも連の婦人も！又急に厭な氣持がして、あの婦人は自分の生れぬ先からの敵同志で何かの怨念で自分に付き纏うてるのぢやないかとも思はれ心さう思ふと急に行つて今度は向ふから挨拶しても面を反向けてやつて見度いやうな氣もする、兎に角行つて見度い、ましてみだらな席ぢやない！

然し今迄の自分の品行は如何にも公明正大なものであつた、人に招かれて料理屋へ行く卑しむべき事ぢやないか、……何故そんな處へ行き度くなつたのだ、あゝ我ながら分らない、よし加奈村に相談して見やう、きつと彼の人は留めるに違ひない、留めたら夫を振り切る事は出來まい、出來ない、……然るに……今其人は却つて進めるやうな口吻ではないか、あゝ僕が如何に辭を設けても、夫を打破つて留めて貰ひ度いのに、之では反對の結果になつて了つた！

『けれども僕は社會の人たるを好まんのだから……僕は何も無理に社會全體に迎へられずとも、眼識ある一人に知られたら夫で充分なのだから……』

『否、さう言ふと何うやら世人の機嫌でも取れと言ふたやうに聞ねるが、さうではない、

社會の荒波に卷き込まれて流れても、超然たる處があつたら可いのぢやないか。』

『……』

加奈村の語氣はます〳〵進める方に近づくではないか、然らば之は神が命ずるのであらうか、之が爲に我が運命の糸の縺るやうな事はないのであらうか、夫とも却つて之が爲に好運命に進むのであらうか、或は自分は既に惡運命の蜘蛛の圍に搦められて逃るゝよしもないのか知らぬ、然し少しでも疾しくない方へ進むのが至當ではあるまいか……。

『……けれどもねゝ加奈村君、君は昨日座の歸りに僕に人氣負けをしてはならぬ、曲つた道へ入らぬやうにと言うたのは詰り斯う云ふ場合の事を言つたのぢやなかつたのか。』

『さう〳〵そんな事も言うた、此頃餘程君の樣子が變つとる處へあの時は妙な噂を聞いたのでね、夫で心配の餘り厭に異見がましい事も言うた、然しぢやね、む？噂か。怒つちや不可んよ、君がね、近頃藝者町へ出入ると言ふのぢや、なに、其噂の誤つて居る事を信じたればこそ此樣に茶屋遊入りも進めた譯ぢやないか、君には杉君と言ふ生きた證據がある。のぢやもの、あアに言うた奴ぢやつて詰らぬ者なんぢや、氣に掛くるにや及ばんよ、然しなアー筑波、今夜行けば必ず藝者の三四人は居らう、何も僕が君を信せぬから言ふ譯でない

が、藝者などと言ふものは、風が吹いて波を分ける迄もなく、自ら波を分けても思ふ岸に寄つて來たがる浮草同前なものなのぢや、最も之や藝者ばかりではない、華族の令嬢であらうと、又は堅氣の娘でも、幸ゞ嫁に嫁く迄相手の無かつたのを以て品行方正と世は名付けるのぢやから藝者ばかりを惡く言はれはせんのぢや、中には歴々とした良人のある令夫人でさへ、恐るべき罪を犯して居るものもある……夫や一人として操正しい女などと言ふものはありやすまい、されどもぢや、素人の娘となると多少學問を仕込れて居るから、例へば男に逢はぬ程の淋しさは、本を讀むなり、歌を詠ずるなり、又は畵を畫くなりして慰むすべもある、然し藝者と來ては其樣な方面には一切無趣味ぢやから、昨日は東今日は西の格で、決して隙のある戀にや滿足出來る筈がないから、從つて一人は守り得ぬ道理ぢや、そんな者に迷つてからが、實が有るの無いのと言ふのは馬鹿の骨頂で、有るやうに見せて無いのが藝者の價、又無いのを有る積りになつてるのが客の價なのぢや、然し夫とてもお互ひに淺い上澄の水で、ちつとでも深くなるが最後、直ぐ濁つて了うのぢや、なアー筑波、夫を心得て居つたら、何も恐るゝ事はなからうが。』

『では僕が行つても君は感情を惡くしはせんのかい。』

『さう、君の樣に一々人の意向を聞いて居つちや動かれはせんぢやらうが。』
『けれども他の處とは違ふから……』
『違ふから如何あのぢや、自分で行き度いと思ふたればこそ相談にも來たのぢやらう？厭だと思ふたらば行かぬ迄よ。』
『うむ！……』
『夫で、連は？』
『座長と花井君』
『淺間君は？』
『話さんのださうだ。』
『さうか、花井君？……君が君だから大丈夫ぢやらう。行き給へな。』
『？』
『行つて見給へ、お妻さんも行かれるんぢやらう？』
『行くだらう。』
『連の婦人は？』

『……如何かなア。』
『彼の婦人はなか〳〵美しいな。』
『うむ！』
『確か菊代さんと言うた、君が夢に見たのも彼の婦人ぢやらうが？』
『ね？、』
筑波は一方あらず胸をとゞろかす、
『はゝゝ、まア可ね、ま、ま、行つて來給へ、何も經驗じゃ。』
『さア……』
お互ひに默然となる時、舞臺の波音を掠めて仄かに、水鳥の聲が聞ねる。
忙たゞしい足音、例の黑服の頭取が眞赤な顏をして飛び込む、
『ね、加奈村さん、大分時間が迫りましたから、大詰は直ぐ開けます、どうぞ直ぐと早目に支度を願ひます。』
『よし〳〵。』
『どうぞ筑波さんも……』

『あゝ、宜しい。夫ぢや加奈村君、僕はもう一度考へて來るから……』
『うむさうし給へ。』
『ぢや、失敬。』
早くも加奈村は後向に鋭臺の白粉を溶きあがら、
『失敬。』
頭取の姿は神仕への烏かや、立どころに影を隱した。
かゝる處へ目の色變へて走けこんだ長太郎。
『先生、加奈村先生、うちの先生は……』
と息を切つて、扇も用はぬ。
『れゝ筑波君は部屋へ歸つた。』
『否、先生は山川さんの……』
『うむ、行くと言つて居つたか。』
『ハイ、僕は實に……うちの先生が藝妓羅と肩を並べて割間然と……』
『まア、座つて靜かに言つたら可いぢやないか、……』

と加奈村は面を向けず、
『夫や成程、今迄の俳優はさうぢやつた、今でもある部分にはさう言ふのが多い、然しさう言ふのが多いからと言うて何も筑波君も其の眞似をせにやあらぬと言ふのぢやあるまいが、僕は其習慣を筑波君に破つて貰ひ度いと思うて進めたんぢや。』
『夫ぢや先生が進めたんですか。』
『さうぢや、君よりや僕の方が筑波を信じとるやうぢやな、うふゝ、君は筑波君も酒席へ、出たならば、從來の俳優同樣祝儀を貰つてひよこ〳〵御辭義をして、へぼ料理に舌つゞみ打つと思つとるのか、さうぢやあるまい、もしも筑波をそんな人物と思ふならば、君は潔よく筑波の膝下を離れて他に師匠を求めなければなるまい。』
『夫は餘り……』
『まゝ可に、安心してお出で、僕が進めたのぢやから僕が責任を負ふ。』
『ハイ。』
『早く行つて遣り給へ、そら幕が切れた、筑波君は板付ぢやらうが、……』
『夫では……』

『さう心配するなよ。』

加奈村が優しき聲を背に負うて、杉は急いで部屋を出る。

廊下に漸く上草履の行交繁く、下座はなほ波の音つないで引返し。

（十一）

『已ア何てつても何だな、筑波つてね奴が一等上手ねと思ふな。』

早蕨座の木戸を眞先に飛び出した印半纏突掛け草履の二人連れ、共に廿八九の大男、一人はさり〳〵と體の締よく、一人は何とあく股引の紐も緩さう。

未だ人足しげからぬ女橋は、月が良いのかとばかり、電燈の光にしろ〳〵と照らされて橋の右手ある長屋の羽目に「花見船」「ます釣り」毎朝三時出船あると書いた堅長い大きな二枚の札に、消勝の墨色さへ朧に見ねて、川を隔てた箱崎町の鋼鐵倉庫の亞鉛張の大戸も早や閉され、水には苦をかけたる川船幾艘、岸を枕の眠深く、空には星影淋く、怪しい黑雲が西へ流れる。

『うア、筑波つてねのは、あの華族の若殿に扮つた奴だらう。』

遊ればせに追ひついた方が、少し呆けた聲で言つて大股に一つ踏み出すと、色の黑い素足に眞白あにこくの鼻緒が厭に際立つ。

『華族は幾人も出らアあ、お前の言ふあア何れなんだ。』

惡氣はなささうだけれど、兄分と見ねて少し高慢あ口の利きかた。

『あの何よ、チョビ〳〵と鬚のある、素敵に好い男のよ。』

『濱邊へ出て束び髮の女と舟へ乘つた奴か。』

『さうよ。』

『さうぢやねねやな、彼奴も下手ぢやねえが——ありやア富士野つてね座頭なんだ、筑波つてねのは、そら序幕に幸つてハイカラ女が花園に居ると、花を澤山に持つて走けて出たぢやねねか、十七八の洋服を着た若樣よ。』

『あゝ、あの頭を短く刈つた淡白した奴か。』

『さうよ、彼やアあのハイカラの弟なんだ、夫であの姉さんの幸つて奴が、詰りもしねね意地づくから、自分の心にはさうも惚れて居ねね彼の豪家の處へ嫁に行くつてんであの弟が——弟の名前は綠てんだ、名前からして好いなア——其奴が、そんあ詰らねね意地を張

るもんぢやねね、僕たつてまだ〳〵學校へ行かなくちやならねねんだから、何うか姉様も家に居て呉れろつてんだ、何てつたつて藷家の家は恐ろしく貧乏でよ、而かも、何處だつけ？彼んな濱邊に住んでるんだから、學校なんか、とても陸あ丶アねねのは知れきつてらアな。するとあのハイカラの言ふ事には、何も私が清島さんの處へ嫁つたからつて、貴君迄東京を去るには及ばあい、貴君は立派あ藤浪子爵家の嗣子なんだから、淋しくとも此邸に一人殘つて天晴學者になるやうに修業して呉れ、私は如何しても清島さんを助けると決心したんだ、今若し此處で清島さんの方を袖にして、橘――之がね前の言つた好い男の華族で藷家とあのハイカラを張り合つたんだ――な、其橘の家へ嫁く事になれば、みすみす貧しい清島を捨て丶富貴あ橘に付く譯で、そんな無情な事は出來ねねと言ふと、夫はさうかも知らねねが何も今が今他家へ嫁かなければならぬと言ふんぢやねねんだらうから、どうかもう少し考へて見て呉れ、僕とても親身は只姉さんね前一人だのに、その姉様にも離れて了うならば學問あんかする張合もなくなつて了ふ、姉さんの氣性は僕もよく知つてるから、さう思ふのも尤もだが、きつとそんあ意地づくで事を計らふと今に後悔する事がある、どうか思ひ留つて呉れと頼むのに、何も私が居ねねたつて、何とかも居れば何とかも居るつて家來の名を言ふんだ。けれども姉さんがあればこそ今迄も學問したんだからつて、遂々、僕も藤浪家を捨て丶も姉さんに付いて行くつて縋りつくのよ、彼處をお前、他の俳優で見ねねな、如何したつて厭味にあつちまうんだが、さうあらねね處が彼奴の伎倆で、彼處は筑渡の身上なんだ。』

此時、急ぎ足に二人を一歩追ひ越した若者、如何したのか偶と歩みよどむと、再び印袢纏の後にあつて只管二人の話に耳を傾け始めた。

呆けた聲はやつと得心が行つたやうに、

『ふむ、さうか？そしてあの穢ねね家の處は彼や何なんだ。』

『驚くぜ、手前は芝居を何處で見てるんだ、全で分らねねんか。』

『あに、分つてる事ア分つてるんだが、一寸複雜かつた筋だからあ。』

『フッ、馬鹿にしねねな、あんあ分りい丶芝居をよ。』

其儘默つて了ふのかと思へば又克明に話し出す。

『夫なら已がすつかり説明して遣らア。あの穢ねね家は彼や藷家の清島の家でよ。座して暮せば山も空しつて諺にもあらア、ましてやそんな御不心得の御方には座一本もね邸の物

はさし上げられませんと三太夫が頑張つたから、姉弟はほんの着の儘で邸を出たんだ、た負けに、餘り仗倆のある畫家ぢやねにんだから三人は只もう食ひ込んで行くばかしの處へ畫家は肺病になつたと來た。』

『やれ〳〵、さうかに、而して彼處へ出るいがぐり頭と結び髪の意氣な奴ア何者あんだ。』

『分らねにのかに前にやア、驚くあア、彼がお前、序幕の幸つて御嬢さんと緣つて若様の成れの果てぢやねにか。』

『夫ぢやア續きあんだあ。』

『フッ厭にあつちまう。』

『まアそんな事言はねにでよ、面白えから先を話しねえ。』

『まず〳〵驚かせやアがらア。』

『まア可いやな堪忍しや。頼むからよ。』

『あに、已だつて好だから話さねに事アねにんだが、餘り分らねにもの。』

『分るよ、今度つからは分らせらア。』

『皆り前よ、さう何時まで分らねえで堪るもんか。』

『まア〳〵さう怒らねにでも可いやな。』

『ぢやア、いゝか、しつかり聞け……その……手前が話の腰を折るから混がらかつて先が分りやしねね。』

『あアに分つてらアな、肺病が食ひ込んでよ。』

『貧乏が舌を出しやアがらア。エヽオイ、あの濱邊の處で畫家は死ぬ、橘は膳を据ゑるつてんで幸は開いた口に牡丹餅だ、昔張つた意地なんか遠に忘れて、もと〳〵畫家よりは橘の方に氣はあつたんだから、邸の方の體面さへ好くば離りてねとなるんだ、さうするとそら弟が承知しねにや、夫ぢやア姉さん義兄さんに義理が濟みますまいと言つたらう？あの「義理が」と尻上りに言ふ處が彼奴の癖で、最負の嬉しがる處よ。あゝ言はれると思はず「筑波」つてね聲を掛けずにや居られねにやあ。何しても上手にもんだな、尤も役も好いや、何だつてね前、あの姉さんの爲めにやア緣は身皮脱にでるんだ、夫だからね前何の位彼女にやア恨はあるか知れねにんだ、けれども、決して恨まずによ、あの女が自業自得で難船して死んでも、まだ〳〵義理を立て通して坊主にあつてよ、さうかと言つて惡く強情なんかと思や、矢張り親から誂られた家の大事な事は忘れねにで、あの氣の毒あ坊主の妻で、

家名も嗣がう、新たに學問も始めて、立派に名を擧て見せると言うんだからな、誰だつて氣の毒がらねねものアありやアしねね、けれども、如何に義理がてね芝居でも、已らア若しあの役を外の奴がしたんぢや何んとも思はねねよ、あゝ！彼の筑波つて奴はた前、夫やア實に俳優に似合はねね堅い人ださうだ、假にもお前、芝居は無學の學問とさへ言つて、言はゞ芝居小屋は己達の學校で、俳優は先生よ、其先生ともあるものが、舞臺では惡事をしちやア不可ねねの、義理は缺いちやアあらねねのと言ひながら陰へ廻つちやア、女ア騙して金を取るやら、惡酒を飲む、義理は缺くつてんぢやア、敎へが敎へにならねねぢやねねか。已アさう言ふ俳優の多い中に一人でも筑波のやうな人が居てよ、其奴が又運よくもあの役に當つたんだから、餘計感じもしやうてんだ、若しもた前、彼役をあの女になつた淺間のやうお女食ひが演つたと思ひねね、已ア屁とも感じねねよ、あゝ己ア何んとも思やしねねよ。』

後を尾けた彼の若者の足がふと又行き惱む。とう〳〵芝居がへりの繁き袂は、宛然小流れのやうに、岸の小草に塞かるゝ木の葉とも見ゆる彼の若者を一人殘して、ずん〳〵と流れて行く。

『アラ〳〵〳〵。』

と折から勢込んだ二挺の人力。

『あゝッ一寸待つてお呉れ。』

先の母衣から洩れた疳走つた女の聲に、二人の車夫の足が見事に留まると、後なる車上に美しい顏が斜めに見透す。

『ちよいと、貴君筑波さんぢやないんですか。』

『は？』

木の葉の若者は思はず顏を上げる。車夫が照らした提灯の光に、頽の靑白い厭に沈んだ筑波の顏が見ゆる、筒袖の腕を組んで肩さへも力おく。

『まアほんとに筑波さんですね、私山川ですよ、如何したんですねね、そんな處に立つてさ、あの花井からお賴みした處へは行つて下さるんでせうね。』

『はア、兎に角一寸家へ行きまして……』

と氣が乘らぬ。

『私達も行つてますから、た早くね。』

『貴女方も？』

とつい口が辷る。

『だから、そんな處で呆然してないで早く入らつしやいな、れ厭ぢやないんでせう？』

『……』

（十二）

『ア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワ。』

と拍子を取つて幼いのは手遊びの書筆を運ぶ。

『イ、キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、イ、リ、井。』

老いたるも之に從けて縫針の先を動かす。

書筆には朱を含み、朱は十角をおして白紙は輪を畫く。針は黒き糸を負うてすく〳〵と背筋を縫ふ

『ウ、ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ル、ウ。』

幼いのは額髪を薄く下げて、前髪を大きくふつくりと取り、巾廣の白茶のリボンで根を

結わてれ下げにした、王母珠のやうに肥つた頬赤く、額白く、目鼻立活々として、身の輕さうな、可愛らしくて品の好い、馴れ難い處もあつて極無邪氣な、露ちやんと言ふ八歳になる筑波が秘藏の妹。

『エ、ケ、セ、テ、ヱ、ヘ、メ、エ、レ、エ。』

老いたるは皆様御存じの老婢お鐵、老眼に眼鏡もかけで、拙からず男物を仕立てる。

『オ、コ、ソ、ト、ノ、ホ、モ、ヨ、ロ、ヲ。』

お露は一枚剝つて下の紙で畫いた人の顔に、髪を生やして瞳を入れる。

出枯らしの番茶のやうな色におつた壁六疊の間に、押入が一ッ、臺處との仕切の三尺の壁の前に蠅張を置いて、天井から莖細具の籠を下げ、之には玉子を奇麗に盛つて、何れも微塵の埃おく、花やかに人の目を引く光はおけれど、賤しい輝をも待たず、尊い人の手入が嬉しく仄めく。

『誠にも「泣く子に乳」つて事があらアな。』

と何かは知らず、暗夜の白日をしんみりとした人の話。お露は驚いたやうにお鐵の顔を見た。

『辻うらア、辻うら。』

探偵だと噂のある新前の辻占屋の皺枯れた呼聲が夫に續いて行き過ぎたかと思ふと、急に寂然として巡査の靴の音も響かぬ。

『婆や、芝居は最早濟んだらうか。』

淋しさうにた露は筆を置いてお鐵の膝に寄る。

『もう疾うに濟みましてすよ、さア、もう少し此方へ入らつしやいまし。そんあに貴女れ寄掛りになると婆やの御裁縫が出來ません。』

戸外を又悲しげな笛を鳴らして按摩が通る。

『婆や、あの按摩は上手かい。』

『如何で御座いますかねね。上手ならお揉ませにありますかい？』

『さうぢやないけれども、あの按摩は盲目かしら。』

『そうで御座いませうよ。』

『按摩盲目に當つても知らない。』

とお露は直ちに立つて眼を閉じ、片手に拳を作へ、片手を後へ廻して、腰を屈め、杖御く

真似をして間の中を歩く。

『あら、厭でございますねね、そんあ呆けた真似をなすつてさ、ほゝゝ、そうらお蠅帳の角！お危いからお止しなさいまし。たッほゝゝゝ、厭だ、まア白眼なんかなすつてさ、ほゝゝゝ。』

途端に格子が開く。

『たや？』

た鐵は忙てゝ釣洋燈を取ると、た露はいち早く玄關へ通ふ襖を開けて、

『兄さん？』

『た生憎様、僕ですよ。』

鐵は詰らあさうゝに洋燈を自在釣へ掛けあがら、

『杉さんかい、まア嫌だねね。』

『何が嫌なのよゝ、何時でも僕が顔さへ出しやア、杉さんかいだ！、有難くもねね、ねねた嬢さん。』

杉は脱いだ帽子を玄關へ投り込んで襖を閉てる。

『何てまア粗暴な言葉づかひだらう、お前さんは段々不可なくあるよ、御覽な、嬢ちやんが仰天して御出でなさる。』

『ふむ？大きな事を言つてらア、仰天なんかしてるもんか、ねねね嬢さん。』

と杉はあほ立つた儘、畫筆の側に何とも言はずあつけに取られてる禮露の肩に優しく手をかける。

『ね？兄さんで無かつたから仰天しましたか、しやしあいでせう？、同じ男が這入つて來たんですものねね。』

と其儘其處へ四角く座る。

『おい、杉さん、仕様がないねね、其處へ座つちやア私の處が眞暗になつて困るぢやあいか、外に座る處が無い譯でもなし。』

『煩い女だあア、一々叱言を言ふ。』

獨言きながら夫でも座を轉へて、

『やア、ね嬢さん畫を畫いてるんですか、先生の畫の具を用ふと叱られますよ。ね、御嬢さん。』

杉は言ひあがら身を屈めて、洋燈の下を潜つてね露の左手へ行く。

『まア、ほんとに、なんて事をするんだねね、若しも洋燈に觸つたら如何する積りなんだい。落せば火事だよ。』

『落ちないから無事だ。あッはゝ、ね嬢さん、先生のを用つちや不可ませんよ。』

『嘘よ、之は私が別に買つて戴いたのよ。ねね婆や。』

『さうで御座いますとも、杉さんぢやあるまいし、無暗に他人の物なんかに手なんぞ御付けあさるものかね。』

『ね？杉さんぢやあるまいし？怪しからん事を言ふぢやないか、何時僕が他人の物に手を觸れた。』

『しら〳〵しいよ、覺がなけりやねめで度いのさ。』

『あゝ分つた、まだ此間の石鹸の事を根に持つて居やがる、君の圖拔けた客嗇には恐れ入つたよ。ね嬢さん、こんあ人に喧豚うんぢやありませんよ、夫よかも僕に一寸其筆を貸して御覽なさい、僕が好いものを畫いて見せますから。』

『ねゝ、今少し御待ちなさいよ、今、一寸畫きかけてるんだから。』

『一寸、一寸だから貸して下さいよ、直ぐ返すんです。』
『だつて今、兄様の顔を畫く處あんだから。』
『先生の顔？　違ひまさア、ちつとも似てやしません、僕に貸して御覽なさい、一分で畫いて見せまさ、一分！』
『私も一分あのよ、一寸待てらしやい？』
『客畫だなア、貸したつて宜いぢやありませんか、やア又違はア、先生の顎は痩せてたつて、其様あに尖つてやしませんよ、も少し下を丸く……』
『杉さんに止しよ、何だねえ幼さい子ぢやあるまいし、明いてから貸して戴いたら宜さゝうなもんぢやないか、夫よりか、た前さんは一體今頃何しに來たのさ、宿つて呉れるなら呉れる、さうでないあらあいで此方にも都合があらアね。』
『宿るんだよ、先生から命令なんだ、家には彼の通りの婆アばかしだから、貴様行つて宜しく守つて呉れ……』
『もう効能は澤山だよ、夫ぢや私は先へ寢るからね。』
『よし〳〵、先生も貴様行つたら例の通り婆やは寢かしつちまへと言はれた。さアさア裁

縫なんか早く納つて寢たまへ〳〵。老人は須く早寢に限る。』
と畫筆は絶念めて今度は婆やの糸卷を手遊にし出す。
『私が起きてると番毎凹まされるので、邪魔にする事！』
『ヘン、憚りあがら、僕はこで婆やさんに凹まされた覺えはありません。』
『上手く言つてるよ。』
『全くさ、ねえお嬢さん？』
『私、だつて凹されるつて知らあいもの。』
『凹まされるつて言ふのはね……』
『又杉さん、そんな下らない事をお教へ申しちや不可ないよ。』
『正に！　斯う言ふのを言ひます。』
と嘯いて糸卷を天井へ投る。
『杉さアん、惡戯は最早止してお呉れつてば。』
落ちて來るのを手早く取り込んでむつとする。
『よう〳〵怒りましたね。』

『當り前さ、ほんとに、そんな事して〻間に書抜でも讀むがい〻ちちおいか。役者は空つ下手な癖に惡戯ばかり上手になつてさ。』
『好きこそ物の上手あれで、今に惡戯の大先生になるんだ。』
『そしたらさぞ御弟子が出來ませうよ。』
『先づ第一に婆やさん！』
『誰が人ッ。』
『でも現にしてるぢやありませんか。』
『馬鹿にわしな、お仕立物だね。』
『君の如き老人の裁縫は惡戯に等しきものさ、さアもうい〻から早く片づけ給へよ。』
『餘計なお世話だよ、人の事よりも自分こそ四邊を片づけて二階へ行く支度でもわしなさいな、さ、其處の物尺を取つて下さいよ、あら序でに糸もさ。』
『之だから老人は煩い、今後から取つて遣らうと思つてる中に言ひ付けるんだもの、藝術家杉長太郎たるものうんざりせざるを得ずだ。』
『わ互ひ様さ。さア嬢つちやん、わ二階へ入らしてなさいましよ、婆やはお先へ御免蒙り

ますかね。』
『あ〻！』
『へい？夫ぢやアわ嬢さんはまだ寢ないんですか、もう十二時過ぎてますせ。』
『い〻んだよ、嬢ちやんは最前一寢入あすつたんだから、まだ御眠がありませんよ、けれども眠さうになすつたら直ぐ寢かして上げて下さいよ、轉寢をさしてお風邪を引かしちや困りますよ、好ござんすか、お前さんの眼は確だらうね。』
『下らない事を問くない、何時でも先生の遲い時は僕が嬢ちやんを引受けてるんぢやないか、安心して早く牡丹餅の夢でも見給へ。』
『どうも憚り様！、ほんとに私の前ぢやこんな憎い口を利いてながら、旦那の前へ行くと全で猫のやうになつてさ。』
『婆やさんの前ぢや虎のやうだ。』
『煩いよもう。さアお嬢さん、わ寢間着を召してね、お二階へ入らつしやるんですよ。』
婆やは押入から淡紅色子ルの單衣を出して、お露に着かへさせる。
『そしてねお嬢つちやん、最前御兄様がわ歸りになりました時に、そら嬢つちやんは丁度

た眠だつたでせう？だもんですから大變がつかりなさいましてね、今日はまだ露ちやんとしみ〳〵御話しをしないから、今度目が覺めたら起しといて呉れつておつしやいましたよねゝ杉さん、先生は二時までにやれなりなさりやしまい？』

そつと畵の具を手の平に塗つて居た杉、忙てゝ止めて振りかへり、

『あゝ、遲くも一時半には歸るつて。』

『夫ぢや直きでございます、けれ共我慢は遊ばすなよ、た眠になつたらた床へ入れてた貰ひなさいますんですよ。』

『あゝ！、夫ぢやお寢み。』

『ハイ〳〵、そら、杉さん、何してるんだね、嬢つちやんは入らつしやるよ、早くさ。』

『おつと、待つて下さい、洋燈を持つて行かなくちや……』

と狽狽る。

『惡戯の間！、いゝ氣味いゝ氣味、洋燈は二階にありますよ。』

『何だい意地惡！マッチを出せ、早く出せよ、ねゝ嬢つちやん、今呼んで上げますからお待ちあさいよ。畵の具は持つてつて上げませう、紙は貴女持つて入らつしやい。』

杉は一段ぬきに二階へ飛ぶが如く。

『忙てゝさ。』

婆やは輕く笑つて裁縫を押入に入る。

『嬢つちやん、早く入らつしやい。た化けが居て面白いから。』

と杉が呼ばはる。

『又あんな事を言ふよ、嬢つちやん嘘ですよ、大丈夫婆やが見てますから早く入らつしやい。杉さん恐怖しちやいけませんよ、いゝかい。』

『いゝよ、嘘でも早く入らつしやい、早く來ないと、繪の具を用つて了ひますよ。』

『婆やゝ？』

『嘘でございますよ、あんな事言つて怖すんですから平氣で入らつしやいまし、杉さん夫ぢや頼みましたよ。』

『宜しうござり奉る。』

お露は兩手と蓼水引の紙を抱いて、跣足可愛くする〳〵と階段を昇る。

鐵は今更に可愛さが身に染みて、うつかりぼんと見惚れて了ふ。

た露は中途で振りかへつて再び、

『れ休み。』

『ハイ。』

婆やは心の中にほんとに家の嬢ちやんは金花虫の様だと感じる。

やがて階上から稚氣あいお露の笑い聲が聞ゐると、やつと安堵して、婆やはざつと邊を掃いて床を敷き始める。

戸外を一臺車の音、ガタリと消火栓に當つて遠く消ゐる。

『たや？』

ふと手を止めて鐵は耳を澄す。

『雨かしら？』

はら〳〵と軒を打つよ。

（十三）

同じ夜の事、筑波が招かれた某割烹店の唯ある四疊半に、燈臺袖に暗くして、ひそひそと何をか語らふ男女あり。

むら竹の陰もいと濃き彼方の離座敷には、臺廣の音も蕭然に、夕顔を琴に合せる。

いつしか戸外は雨となつて、丸窓に騒ぐ金剛篁の青葉ざわ〳〵と、風が洩るのか、間の中に燻らす香の煙が、しづ心もなくゆら〳〵と搖いで、女のか黑き嶮田髷に、薄すりと香を殘して、男の肩に縋れて消ゐる。

琴……訪ひてや見むと黄昏に……

山川の一座は奥の廣間と見えて、頻りに笑聲賑はしく、電燈紫に、盃洗に鳴る盃の音ちり〳〵、ちらり〳〵酒の座の漸くに亂れかゝる。

『厭ですよう。』

女は突然男の肩を衝く。不意を食つて男は爪立つた足を投げ出してギバを切る。

『おゝ酷ゐ。』

と眼を見張れば、

『酷いたつて……お前さんが惡いわ。』

と女は仇な目づかひ、男は起き直つて、
『何が惡いんだ、だつて、詰る處はさうぢやアねねか、ヘンお樂しみ！』
と意地の惡い眼をする。
『好くつてよ、どうせ。』
女はべたりと腰を落して床柱に寄れば、裙が亂れて四季模樣の絽縮緬の長襦袢が溢れる。
琴……寄する車の音づれて……
『よオ、筑波の令夫人かの字の君聊か御立腹の體とござい、かね。』
と男は澄したもので、袂から卷煙草を出してマチを擦る。
『復！』
女は美しき手を上げて立ち上ると、男は煙草を銜へた儘、兩手を向うへ差し出して後へ退りながら、
『眞平々々、平に〳〵、お前さんのビツシヤリには實際恐れる、三日痛むからね。』
『夫ぢやもう調弄ひつこなしよ。』
『へイ〳〵。』

『恐れ入つたか。』
『秘かに〳〵。大聲を發しちや不可ません、苟しくも秘密だ。』
『だから眞面目に相談して下さいな。』
『相談はもう出來てらアね、私にや此上眞面目になりやうはありません。』
『隨分な眞面目だ事。』
と女はやゝ呆れ氣味。
琴……透間もとめて垣間見ん。
男は酒臭い息を一寸吐いて、
『無汰は止しつて事にして——松島の方は筑波君に當らうともお前にや受合だ、夫に第一あんな下廻りがゐ前を引張らうてなア、榮燿の沙汰なんだ、續くもんかよ。尤も憎さが百倍と來たら向不見奇ら覺悟も要る處だが、根がゐ人よしなんだから、其方の方の御心配御無用だ。夫よりも我々の大將！甘さうで如何して、へち嚴しいんだから、此奴が一番恐ゐんだ、如何して〳〵油斷大敵だよ！だから餘程用心して掛つて呉れ、ね？彼方はちやんと話をつけてあるんだ、ガラ〳〵ッ、横づけになると、何卒此方へッて寸法さ、案じおさんな

よ、夫から後はお前の技倆次第さ、何？お敵か、何アに上邊は堅さうだけれども、あゝ言ふのが強盗がへしになると面白いんだ、夫も手遲れにあつちや不可ねね、仕込ひのは今の中よ、なに人が惡いもんだ！ちつとは揉んで遣らなくちや爲にならねね。ねへッへ、ちやア、其樣言ふ事にして、うまい機會を見付けたら何でも構はねねから、車へおん乘せて繰り出しつちまひねね、後は己らが引き受けらア、宜いよ、宜いつたら、大丈夫醉つてたつて、ね？へン詰らねね心配をしたもんだ、己らは物好おんだ、只美しいのに嬉しかつたよと言はれてねのが病さ。罪アありやアしねね、夫ちやアいゝかい。ちや私ア……』

『御免……』

知らぬ間に外を人の氣色、二人はぎよつとして顏を見合す。

琴……扇に炷きしめし空炷きものゝ……。

流石に男は心づよく、

『誰？』

『私！かのちやんは此方？』

『あら、姐さんなの？』

『あゝ！』

『なアんだ、お歌さんあら御遠慮あしだ。』

『もう御用ずみ？』

『丁度だ！這入んねね。』

『ちやア御免なさい。』

第一に白地へ墨畫の雲龍の帶が眼に付く女、髮は銀杏がへし、大阪格子の伊勢崎を着て垢抜のした不容貌な、此家の女中頭に位すべきお歌と言ふ廿七八。

『花井さん、貴君大變お座敷で旦那が採して入らつしやるから早く行つて上げて下さい、かのちやんは私が後からいゝ按排式に送り込みますから。』

『あゝ、夫ぢやさう言ふ事にお賴み申しませう、すべて歌ちやんに限る。』

『私も貴君に限るのさ。』

『おや、早相談だ事』

『かのちやんのとは譯が違ふのさ、ねえ花井さん？』

『大いに然り、其處で何家にしうやね、』

『さア？手取り早くかのちやんと彼の人との後押しをして行かうぢやありませんか。』
『其奴ア妙！』
は、、、と三人忍びやかに笑ふ。
『戯言は又として、早く入らつしやいよ。』
『忽に嫌ふね、時に大將は氣取りやしまい？』
と親指を出す。
『富士野さん？大丈夫！』
『夫で先づ。』
と花井は大袈裟に胸を撫でる。
琴……主は――白露、ひかりをそへて……。
『では、私は出かけるが……歌ちやん、向ふの離座敷は酷く何だが……ね馴染かい？』
『全然知らず、家の者は女將さんより外は一切寄せつけず。總て藝者衆が取りしきつてるんですよ。』
『だつて顔位は。』

『處が、何時何處つから這入つたか夫も知らないんですもの。』
『へね？一人？』
『否、御夫婦連とか言ふ噂。』
『いよ〳〵だねね。』
『なら、藝者衆は誰なの？』
『琴が都さんで、三味線がた高さん！』
『ね、〳〵名代の柔順やだもの。』
『さうさなア、まア、他人の穿鑿は如何でも宜いとして、僕は先へ行くからかのちやんは頼みましたよ。』
『宜しう。』
『ぢや、お先へ。』
『こうもいろ〳〵……』
花井は何の趣向か、羽織を後前に着ながら廊下を行く、足もとが今にも轉びさう。
琴合の手……

『あんなに酔つてるの？』
とかの字は氣遣しさうにた歌を見返る、
『振でせう？まだ幾らも飲みやしないんですから……』
『さう？けれどもあの人の言ふ事は本統かしら……』
『筑波さんのかい？』
『はア。』
『はア？はアとは何だい、驚く手離しなんだよ。』
『だつてた前さんだもの。』
『また限るのかい？有難いねね。』
『だつて氣が知れないもの。』
『誰のさ。』
『花井さんの。』
『知れてらアね。』
『如何？』

『如何つてね、あの人のは全く道樂あんだから心配はありやしないよ。』
『大丈夫？』
『だつて今迄にもあるんだもの。』
『別に何と望みもなしに？』
『あゝ！言はゞ悪い癖さ、尤も御當人にや嬉しがられやうけれども。』
『だけれども、行くかしら？』
『筑波さんかい？』
『あゝ！』
『危いねね。』
『ね？ほんと姐さん。』
とかの字は顏色を變へる。
『伸はちやんと待つてますよ、何時でもた出かけ遊ばせ、奥様！』
言ふかと思へば、イヤと言ふ程かの字の背を叩はしてた歌は逃げて了ふ。
離座敷の曲はいつしか止んで、さらり細目に開けた障子から、靜と言ふのであらう、上

品な廿一二が、擦り抜けるやうに出たかと思ふと、後手に閉て切つて、ふと薄明りに見交したかの字に會釋やさしく、琴爪を脱しながら、すく〳〵と渡どのを向ふへ渡つて、紫の衣がむら竹に消える。

（十四）

ほつと吐く酒の息を、洗ひ髪の鬢に受けて、出合がしら、筑波の前に立ちふさがつたのは以前のかの字。

『あら、何處へ？』

正面に被ぶた廓下の電氣に、女の姿も先とは引きかへて明かに見える。

消鼠色に高麗格子の山繭縮緬三ツ紋の單に、帶は白鹽瀬へ荒磯の蒔繪模樣、半襟は薄目の古代紫に銀糸の雨、島田の根にはわざと薄紅の鬼引を掛けて、小形の銀の平打を深く差す。

『萬歳！』

と間の中に叫ぶ者あり。

女は氣もつかず、不意を食つて無言に立つ男の顔を、赤らめもせず打守つて、

『ねね、何方へ？』

『否。』

筑波は其脇をするりと抜けてつかく〳〵と行かうとすると、女は他に人あしと見て、又間へ廻つて大手を廣げる。

『君は最前にから頻りと妙な事をするが、何か用でもあるのかね。』

『大有り！ほゝゝ、ですから逃がすと大變なの、何方？はばかり？』

『否、さうぢありません、人が見ると不可んから退いて下さい。』

『退く代りにお供さして下すつて？』

『何處へ？』

『何方でも。』

『不審い事を言ふね、僕は別にお供を要せんから。』

『ね？』

『お供をして貰はにやならん處へ行くんぢやないのだ。』

『だつてお供をしたつて悪い事もないんでせう？』
『大きに悪い。』
と筑波はニコリともせぬ。
『ほゝゝ、貴君は制に戯言者ね、さう御仰らずと是非私が御案内する處へお供さして下さいな？』
女はいよ〳〵舌たるく言ひ寄つて、闌廚が纂る袂を上げて、其口元を被ふと、情を籠めて筑波の目元をぢつと見上る。
筑波はつきもなく目を反らして、
『何か、僕には君の言ふ事は分らん。』
醉に苦しき足評危く、筑波はよろ〳〵と左へ避けて行かうとする右の手に女は突然取り縋る。女の手は絹のやうに柔かくて冷たい。
『そんな事言ふもんぢやありませんよう。』
恨がましき其目差し、つんと高い其鼻、小拵な身の取り廻し、花やかと言ふよりも凄艶あれど、濃い生際から肩のかゝりか何となく卑しげに見ゆる。

筑波は靜かに其手を振り拂つて、
『君の名は何と云ふのです。』
女は緋紅の紛悅に口許を押へて、
『ほゝゝ、御存じの癖に。』
『否、知りません。』
『かの字つて言ふんですよ。』
と初心らしく頰を染める。
『ふゝむ？夫で？私が宜しいと言う處まで供をしたがつて、若し僕が地獄へ行く者だつたら如何する？』
女は事もなげに、
『貴君とならば結構だわ。』
『然し極樂なら？』
『何嬉しいぢやありませんか。』
『夫では極樂へ行くと言ふて地獄へ行つたなら？』

『夫も貴君の事なら……』
『否、僕をさう言うて誘ふ者があつたらば？』
『私、一生恨んで取り付いて遺る事よ。』
筑波は始めて幽かに微笑んで、
『夫では君は、君自身を恨まにやならぬ。』
『ね、？』
『君等は、地獄を極楽と思ふて居る、實に氣の毒な者だ。』
言ひ捨てゝ筑波はあれよと思ふ間に向ふの廊下の角を曲る。
取りつく島もなく、女は煙に卷かれて呆然と立ち盡す。
雨が又一しきり庭の若葉を打つて、此處からも見ゆる彼の離座敷の青簾が、風にはあらでざら〳〵と搖いだ。
『おい、筑波の御大將、こんな不景氣な處に何してるんだ。』
見れば花井はまだ羽織を後前に着たまんま、踊扇を襟首に差して、何時の間にか後にふら〳〵と立つて居る。

筑波か知らず〳〵に迷ひ來た細殿の、前は七草を心搏への中庭に、薄まだ若く、紫苑も秋の色に出でず、只萩の葉のやう〳〵延びて、桔梗の蕾のふくらかなのが、雨中の燈籠に仄かに白く見ゆるばかり、虫もまだ鳴かず、後の柱に行燈が薄紅い光を落して居る。
『僕？』
『氣味の惡い事を言ふぜ、僕の外には影ばかり。』
と、此人は誠に酔うたか、足許が怪しう亂れて、謠ひの調子になるかと思へば投げ出したやうに笑つて、
『何して居やると言ふ事さ。』
と妙な手付をする。
『餘り酔うたから……』
『よう〳〵、いよ〳〵た輕式とお出でなすつた、處でね、君は頗る罪だよ。』
『まア、君、しつかりし給へ、酷く酔うとる。』
『いゝや酔はぬ、花井大輔、酔つても舞臺を勤める男だ、れ座敷酒なんぞに酔ふものか。』
と譚の分らぬ事を怒鳴る。

『靜かにじ給へ、他の人が來ると煩さい。』
『そ、そ、それだ、君は振つたな。』
と聲が恐く成る。
『何を言うとるんだ。』
『振つた、正に振りました、かの字は君泣いてるぜ。如何かして遣り給へ。』
『うむ、かの字と言ふのは今の女だな、一體君、彼は如何したんだ、君知つとるなら、はつきりと言うて呉れ給へ。』
筑波は緣に腰かけて文目も分らぬ空を見上げる。
『聞く？其奴ア頼もしい。』
花井は扇を拔いて扇ぎながら、之も筑波の側に蹲居んで、
『彼は君、御覽の通り去る處の藝者さ、夫やア分つてらア、ね？で、日頃、君に逢ひ度い見てねつて譯が叶つて、計らざる今日の對面さ、分つたらう？。』
『分らんねね。』
扨こそ怪しい彼女が最前の言葉、殊に寄ると、此花井も一ッの空の狸？

『空とぼけちや不可ないぜ、かの字は何でも彼でも君に限ると言うんだ、あけすけに言へば即ちラヴさ、之を倒さにしてぶらぶら病ひ、譯して言へば戀の患ひさ、須く君の御手を以て直して貰ひ度いのだ。』
斯かる事には物慣れぬ筑波、大方には推して居たもの、斯う明らかに言ひ出されては何と返事をしたものか、俄かに加奈村が懇しくなる。
『如何だらう、ドクトル、診察處もちやんと出來てるんだが……』
はつとして、筑波は思はず足に當つた庭下駄を突かけた儘、雨も忘れて七草の繁に隱れる。
暫らく呆然に取られて居た花井が、心づいて內々家の者に探させると、わざと開けとく裏の技折の處に下駄のみを殘しては主は雨に紛ぎれて最う分らない。
『へン、ちんけいとうだなア。』
花井が心中に何とは知れずいま〳〵しげに此語を繰りかへす時、離座敷は例のしんみりと、
誰になびくぞ柳ばし……

と味な節廻し、「岸の柳」のあゝ物思ひ！……

（十五）

『まア貴女飛んでもない事を……』

と慌しく貧乏鼻緒の日和下駄を突つかけて筑波の水口を飛び出した鐵は、直ぐ近間なる井戸端に、撫でつけ髪の島田髷、美しい領脚を見せて後向きに、斯かる事には物慣れぬ、頬を染め息を切らして懸命に米を磨ぐ若い女の前に廻ると、矢庭に其兩手を取つて上へ上げたので、女は驚いて細腰によろ〳〵と立ち上る。爪紅の美しい其指の先から、たら〳〵と物憂さうに水が落ちて、桶の中の白水は反みを打つてぐる〳〵と渦を卷く。

井戸端と路次の往來とを、一寸眞似ばかりに仕切つた新しい四ッ目垣に、まだ花を持たぬ朝顔の裏葉が白く朝露に頸垂れて、日もまだ能うは映さず、幽かに渡る初夏の風が、汗ばんだ女の肌に心地よく當る。

『まア、老婆さん、私喫驚したわ。』

とわざとらしい大息を吐いて、やがて可愛らしい笑顔をする。

『否もう貴女より、私の方が何程に喫驚いたしましたか……』

鐵は眞面目に目を見張つて、何故？と言ひ度げな女の顔をしげ〳〵と見入つて、

『何故と御仰いまし、貴女は今朝始めて私共へ入らした御客様でございませう？其た方が

『如何にまアどうせ磨ぐものにしろ、先の家の婆やが仕かけた事をなさるなんて、ほんとにまア私は喫驚いたしました。夫でなくてさへ、私はもう只今旦那に叱られて參りましたんですから、其上此樣な處が見つかりでも致しませうもんなら、ほんとに貴女私はね暇でございますよ。さアもう何卒お羽織は確かに戴きましたから、何卒もうね歸んなすつて。』

女は離された濡手を紛悅で拭きながら、委細を知らねば不審しげに、

『たつて、何を叱られたの、柏家のかの字が筑波さんの羽織を屆けたからつて、何故ね前さんが叱られるの、不審いぢやないの。』

『不審いか不審くないか存じませんけれ共、兎に角、かの字さんと御仰る方が昨晩のね羽織を屆けて下さいまして、一寸お目に掛り度いからと斯う申したんでございますよ。すると急に變な顔をおさいまして何も頼みもしないのに餘計な事だ、女になんか持たして遣す茶屋も茶屋だと御仰つてね、切角お起し申したんですけれ共、直ぐに向ふ向いてお寢みに

なつて了つたんですよ、成程考へて見れば之は私の不念だつたのでございます、もう貴女御家の旦那と來たら、夫や貴女、れ話しにおらない堅藏なんでございますからね、まア如何言ふ御話がございますか存じませんけれ共、どうぞもう御斷念めなすつて、失禮でございますけれども、れ歸んなすつて戴き度いのでございますよねね。之がもう旦那の尋常あんでございますから、惡くお思ひにあつちや困りますよ、折角の何でございますけれど、

と鐵の調子は餘程穏かになる。

女は片頬に笑を浮めて聞いて居だが、暫くして、

『……變ねね、だつて筑波さんは役者ぢやありませんか、役者が其樣に女を嫌つちや商賣にあらないでせう。』

『如何な物か存じませんけれども、宅の旦那樣は、もうざらの役者衆と違つて、夜遊ひはなさらず、女賈はお嫌ひ、暇さへあれば御本を見て入らつしやるか畫を描いて入らつしやるか、もう何方かを御放しなすつた事はないんでございますからねね。大方外の役者衆の樣に、商賣に役者をして入らつしやるんではなくて、役者を商賣にして入らつしやるんで御座いませうから、腕さへれ達者にたなりなさりや夫でもう欲は足りるんでございませう。

と鐵は說破一番する。

『へね？』

と女は目をぱち〳〵。

『夫に貴女、外の御方は存じませんけれ共、宅の旦那樣は、詰りさう言ふ風に遊びのない方で入らつしやる上、芝居が始まれば芝居の事も遣り度いと思ふ處まであさいますし、休みの時は休みの時で毎夜學校へお出でなさいますし……』

『へね筑波さんは學校へ行くの、まア、オホヽ何處の。』

『さア、何でも神田邊で御座いませう。』

『戯言？』

『なんで戯言なんか申しませう、處は好く存じませんけれ共、學校の名前は存じて居りません。』

『夫ぢや何て言ふの？』

『正則つて申しませよ。』

『せいそく？變な名ねね。』

『變でも何でも左樣言ふので御座いますよ、尤も旦那樣の入らつしやるのは夜學でございますけれども、私の孫などは晝間參ります。』

『へゐ？……隨分變つてるのねゐ……』

『孫でございますか。』

『否、筑波さんさ。』

『夫やもう變つて入らつしやいますとも、さう言ふ風で御座いますから、藝者衆などに目あんかおくれなさる方ぢやないんでございますよ。』

と鐵は野暮な口を利く。

『さう？分つた！夫ぢや筑波さんは素人を張つてるんだよ、きつと。』

とかの字も負けずに自棄を言ふ。

鐵は一寸むつとした顏を見せだが、思ひ直してか穩かに、

『張るなどゝ、そんな事をなさる方ぢや御座いません、現に先日なども何方のお方か存じませんけれども、立派な奥樣風の方がゐ尋ねで御座いましたが、其方さへお斷りなすつた位でございますもの貴女。』

『へゐ、奥樣風？その方お斷つたつて？、逢はなかつたの、ほんと？』

『ほんとも嘘も、私がゐ取りつぎ致しましたのでございますもの。』

『夫ぢやねゐ……』

と女も少し氣の折れた氣色。

『兎に角今日は失禮致します、おや〳〵お米が潤けたでございませう、御免下さいまし。』

と思ひ出して鐵は袂から出した襟を掛けると、大急ぎに米を磨ぎ始める。

女は片手を井戸側へ掛けた儘、暫くは身動きもしなかつたが、漸く思ひ切つたやうに顏を上げると、

『夫ぢや老婆さん、私ゐ目に掛る事もゐ米を磨ぐ事も今日は斷念めたから、せめて水でも汲まして下さいな。』

と直ぐ井戸へかゝるのを忙てゝ遮る、

『否、貴女、貴君衆がこんな下賤の業をなさるもんぢやございませんよ。夫に宅の旦那樣は一體生若い方に何かしてお貰ひ申す事が大嫌ひで入らつしやるんでございますから……』

『夫ぢや私も生若いとやらなの……』

『さう御仰ると困りますけれども詰り此邊は土地が狹う御座いますから、ついした事も大きく言はれましてねゝ、又どんな事から、今朝筑波の家ぢや若い女が米を磨いでたとか、水を汲んでたとかねゝ、そんな事からお名前の障りにならないとも限りませんから、どうぞねゝ、貴女此樣な事は放つてお歸りあすつて……』

『名前に障るつてば仕方がないけれど……夫ぢや如何しても筑波さんは逢つて呉れないの？。』

『お氣の毒樣ですけれども。』

と鐵はさつと白水を流す。

「一寸でも駄目？私お前さんにどんな御禮でもするけれどねゝ。』

鐵は空耳に走らして、

『私もねゝ、老人の癖に、こんな意地っ張りを致したかないので御座いますけれど、お家の旦那樣に限つちやア、一旦御仰つた事を押し返す事の出來ない方で御座いますから、どうぞ惡からずねゝ。』

優く宥めてきり〳〵と釣瓶を上げる。

『仕方が無いわ。』

女は幽かに笑つたけれど、目は人知れぬ涙に潤む。

『夫と言ふのも詰りは孃ちやまの爲めを思つて入らつしやるんで御座いませうから、さう思つて、貴女も腹をお立ておさらないでねゝ。』

之を聞くと女は色を變へて、急くまいと思ふ聲も震へ、

『孃ちやま？孃ちやまつて老婆さん何處の人？。』

『何處のつて貴女、旦那樣の御妹子さんで御座いますよ。』

『まア、筑波さんには妹があるの、幾年になる？。』

『た八歳で御座いますよ。』

『さう？小姑なんだねゝ。』

『へ？』

『否……夫ぢやア私歸りませう、折角手傳ふつもりで一生懸命に起て來たんだけれど』

『お氣の毒樣で御座いますねゝ。』

と今は鐵も何となく哀れを感じる。

『だけどもねね老婆さん……』

『へ？』

『筑波さんも……愚痴のやうだが……賤私情なしだと思ふわ。』

鐵が又何か返言うとした時……、ふつと顔を反向けたかの字は、路次口に何を認めたかは、つとした體で思はず井戸端を離れると、物をも言はず反對の抜け道へ、小褄かへしてはら〳〵と走け出す。

（十六）

二階の居間に筑波は未だ其床を離れず、新らしい蚊帳の薄青く映る顔を仰向けに、六つかしく眉を顰めて目を閉つて居る、誰が繰つたのか一枚開けた雨戸の透から、仄かにぼつと差した朝の色に、締め切つた障子が鼠色に暈けて、片寄せた机の上にごたごたと載せた物の中でも、時計、小刀、扇の要、畫の具皿の裏、鋏、ペン先など、艶のある物丈がいやに底光りして、床の間の片隅に載せた置洋燈の紙の笠に大きな平蜘蛛がぴつたりと付いてるのも不味氣なら、ずつと細めた其の炎が黄いろく弱い光を放つて居るのも、餘り心地の

好いものではない。

本箱を並べて置いた方の壁際の衣紋竹には、昨夜着よ親讓りらしい結城紬の單物に、之には似合はぬ阿列布色の羽二重絞りの兵兒帶が、其に濕りを帶びて、しつとりと掛けられ其上の鴨居には筑波が二年ぶの作だと言ふ、六ッばかりの女の兒の、淺黄と鼠との棒縞の黒い亀甲形を染めた筒袖の單を着て、頭の上に大房の紫陽花を倒さまに戴せ、幼けな兩手を恐々廣げて少し上眼遣ひに笑つてる處を、拙からぬ筆遣ひに畫きあげた油畫が、神代杉の細框の額樣に嵌められて掛つて居る。

日は今昇るのか、今迄西の方に紫から薔薇色に暈けて北へ流たれて居た雲も、やがて薄鼠に色變へて、一體に東へ動き出すと、やうやく處々に淺黄色の空も見えて、雲の縁はきら〳〵と輝き出す。

『露ちやん。』

寢てるやうに見えた筑波は、さうでもあいかして物憂さうに其儘妹を呼ぶ。と、開けてある雨戸の側の手擦に寄つて、變り行く朝雲の景色に餘念もなく眺め入つて居たれ露は勢ひよく振り返つて、

『ね、！』
と言ふ。
『お前、最早起きて居るの？』
『え、！』
『杉君は？』
『最早最前歸つてよ。』
『……夫ではね、露ちやん氣の毒だけれども、水持つて來てお呉れ。』
『ね、！飲むのねね。』
『うむ、さうだ。』
『ぢや待つて、頂戴。』
『夫からね。』
『ね、！』
『婆やに、最前來た女は最早歸つたか聞いてお出で。』
『ね、！夫ぢや待つて入らつしやい。』

と下りて行く。
日ざして來たので障子が白く、間の中もやゝ明るくなる、
筑波はぐつと足を延ばして靜かに壁の方へ寢返りを打つと、板元の向ふの隅に立ててある座長から讓られた張り混ぜの二枚屏風に、錆色で雲形を出した短冊に優しく假名文字で書いた「うたゝね」の歌が目に入る、忽ち胸の中には、昨日の菊代の顏がはつきり浮んで頭腦では俳優—名望—金と言ふ此三ッが巴になつてぐるぐると廻り出す。中には名望と言ふのが一番強く殘つて、一時も早く我名を天下に響かー度い、其手段は……と思ひ付くと俄かに押へられたやうに胸苦しくなる。
『兄さん水？』
宛然神の御聲！何時の間にかた露が蚊帳の中に這入つて居る。
『た——有難う。』
『夫からね。』
『うむ。』
『あの、最前の女の人はねなか〳〵歸らないで、種々な事を爲たがるんですつて。』

『何を？』
『あの、婆やの手傳ひをね。』
『うむ。』
『夫から婆やが、兄様に叱られるからつて怒つてもお米なんか磨きうにするんですつて。
『困るなア。』
『夫から婆やが、其お米も取り上げて又歸つて呉れつて言つたんですけれど、夫でも強情張つて歸らぬい時、路次の方から加奈村さんが來ましたつて。』
『加奈村？』
『にゝ！さうすると、其女の人が大變仰天して裏の方から逃げ出したから、婆やが其事を加奈村さんに話したら、加奈村さんが直ぐに後を尾けて行きましたつて。兄さん、つけるつて何でせう？』
『ふゝむ？』
『ねね、つけるつて何つてば、兄さん。』
『追ひかける事だらう、そして加奈村はまだ歸らんのかい。』

『にゝ！、只今ですつて……追ひかけて如何するの、其人悪い人なの？』
『分らんねね。』
筑波は突然一息に水を飲み干すと、ふつと息を吐いて又目を閉れば、又しても今度は夫は〳〵悲しげな顔をした菊代が昔もさせず寄つて來て、ぢつと自分の顔を覗くやうに思はれたので、はつとして、目を開くと、れ露がざら〳〵と蚊帳を上げて外へ出る處。
急に又苦しいやうな懊悩つたいやうな、口惜しいやうな、いつそ死んで了ひたいやうな氣がして一人悶へて居ると、遙か遠くで、
『き、ち、は、れ、た』と言つて笑ふ人がある。
筑波は堪らずがばと跳ね起きる。
下へ下りて見ると夜は疾くに明け離れて、狹い土地の其方此方に喜い人聲も聞ひ、臺所へ出れば最早竈の火は下伏せて、味噌汁の香が鼻を打つ。
大窓の下は又格別、今迄の思ひは忘れたやうに拭はれて、筑波は呆然井戸端で齒を磨いて居ると、
『可え、可え、殘錢は不用ぬ、只二錢ばかりぢや商買になるまいが。』

と言ふ聲がして、今日は恐ろしく亂暴な風をした加奈村が路次口を這入つて來る。

『やア。』

『うふゝ、最早起きたのかい早いなア。』

筑波は一寸頷いた儘臺處へ走け込むと、大急ぎに柄杓で口漱をして、顏を洗つて來る。

『失敬。』

『ね早う。』

加奈村は申譯ばかりに、白の薄羅紗で妙な形に仕立てた其帽子に上から手を掛けて辭義をすると、其儘上眼に筑波の顏をぢつと見て、馬鹿にしたやうに「うふゝ」と笑ふ。

筑波は無頓著に、

『最前も見ねたさうだつたが失敬した。』

『ふゝ、夫や此方で言ふ言葉ぢやよ。』

『其樣な事は可いが、一體何處へ行つて來たのかね。』

『う？』

と言つた儘まだ笑つてる。

『可笑いねね、言つたつても可いぢやないか。』

『威してやつたわい。』

『誰を？』

『かの字とか言うた。』

『ふむ彼の馬鹿をか？』

二人は顏見合して割れるやうに笑ひ出す。

『後を尾けたとか言うて居つたが、實際さうなのか。』

『實際ぢやよ、奴一生懸命に逃げ居つたが、流石は女ぢやよ、ちゃんと自分の家へ走け込み居つた。』

『ふむ？』

『歸りに車に乘つたらば二錢の丁場ぢや。』

『近いのだね。』

『近いと言うて、這入り込んでは不可んよ。』

『馬鹿言ひ給まへ。』

『ま、ま、さう直ぐに怒るなよ、夫でぢや、一體何しに來たんぢやろ』
『分らんねゝ。』
『已や必然花井の差金かと思ふが。』
『ふむ？』
『花井も彼奴も昨夜行つて居つたのぢやら？』
『行つて居つたとも、而かも花井君と彼の女とは能く知つて居るやうだつた。』
『夫見い、夫ぢや之から毎日遣つて來るかも知れぬぞ。』
『あの女がか？』
『さうよ……然し彼の女は不可ん。』
『困つたなア。』
筑波は八を寄せて腕を組む。
『ま、ま、仕方がないぢやらうが……いよいよ困つたら引越したら可ねさ。』
『さうも不可ん。』
『まア未だ其時が來もせぬのに其樣儲く事かい、高が女の一人や二人、朝い前に已が片付

ける、れゝ飯前と言や已も未だなんぢや、君も未だぢやらう？そんなに考へずとも置けよオ、已や腹が空つた、昨夜の今朝ぢやから貴樣如何かと思うて見に來て、ちつとこりや連動をし過ぎたよう。む、左樣、すつかり忘れて居つたが、昨夜は全くお妻さんも行つて居つたのか。』
『うむ！』
『連の美人は？』
筑波の面がさつと曇つて、
『見にん樣であつた。』
『、やうであつた？隱すなよ本統か。』
『嘘ものか、ありや僕を釣つたのだ。』
『釣つた？して見ると貴樣釣られたんぢやね。』
筑波はちらと加奈村を盜み見れば、其人は目を放たず自分の顏を見詰めてるんで、失敗つたと思ふと同時に耳から領脚へかけて、くわつと逆上せる。
『まア可に、夫ぢや約束を逆へたのぢやね。』

『し、失敬な奴さ。』
言ひ戻さうとして却つて又深みへ陥る。
『うむ、然し彼んな席へは出て來ぬ方が奥床しいのぢやよ、來ると思つた者が間違ひぢや……ふゝ酷く考へて了つたね、兎に角飯にして呉れよ、おい、如何したんぢや。』
『實際困つたあア。』
『何ぢやい、未だ其様な事を言ふとるのかい。』
『然しねゝ。』
『うむ。』
『實は話すけれども、昨夜花井君が妙な事を言うたのでねゝ。』
『ふう何を？』
『詰り……僕が彼の女を反ねたのだあ……』
『あの女とは？』
『最前のよ。』
『かの字か？』

『分つとる癖に』
『否や、始めて聞く。あの馬鹿が君を？』
『そんあに君……』
『よし〳〵、夫で如何したんぢや。』
『すると花井君の言ふのには……。』
『待て〳〵、夫ぢや花井君が仲に立つたのぢやね。』
『まアさうだ。』
『怪しからん、君に迄其様な事をするとは彼の男も滑稽ぢやよ、可愛い事をし居る。』
『君、僕は君、本氣に話して居るのに、君が面白半分に聞いて居るのぢや何にもならんから長早止す。』
『おい、何處へ行くんぢや、怒るなよ、一寸己が合の手を入れたからと言うて、女の様にさう脹れるあよ、己は腹を空して聞いてるのぢや、夫で花井が何か言うた？煩さずに早く話せよ、昨夜から夫ばかり心配しとつたのぢやが。』
『夫ならば夫で眞面目に聞いて呉れ給へ。』

己は始めから眞面目ぢやよ。』

『夫ゝら言ふが、其時花井君は、人氣に障ると言ふたのだ。』

『夫で？』

『夫だけさ。』

『夫が如何したのぢや、人氣に障ると言はれたのが貴樣に如何感じたのぢや、恐らく恐ろしく感じたのぢやあるまいが？』

『……』

『恐ろしく思ふたのか。』

『……』

『恐ろしく感じたのならば言はう。「人氣」！　彼れはそも何の固體であらう、割つてしれば何の氣もない、心も無い、只空氣の加減で立つた蜃氣樓のやうなものなんぢやよ、決して長持のするもんではないのぢや、如何に眞に迫つて居らうとも、其中の木には宿る事も出來なければ、其中の家には寢る事も出來んのぢや、例へば完全の形はあして居らずとも、以て製し釘を以て作つた家ならば、雨も風も厭ふ事の出來る頼みのある上に、やがて

は完全のものにすると言ふ望もあるのぢや、夫は成程、今迄貴樣のやうに人氣のある俳優が若し一朝——其樣事で果して人氣の落るものとして——人氣を失うたら心細い事でもあらう、然し未だ貴樣のやうに人氣を惜しがつてる中は可いのぢや、もう一層此人氣が立つて見給へ、遂愛嬌も蒔き度くなれば當込も出て來る、終ひには我れと我が業を束縛せにやあらん事になつて了ふのぢやよ、夫も、最早座長位に老熟して上の人氣ならば恐るゝ事はないのぢやけれ、貴樣のやうな若い身空で、今から人氣を落すまいあどと言ふ心を出しては到底も、成功する見込はありやしないよ。好く考へて御覽、貴樣も好く言ふぢやらうが砂地へ建つた家と巖石の上へ建つた家との優劣で其位の事の分らぬ貴樣でもあるまいが。』

加奈村は言葉を切ると憫れむが如く俯向き果てた筑波の姿をぢつと見る。

路次には人の往來もなく、やゝ照り増る日影に朝顔の葉はしやんとなつて、釣瓶の底を傳ふ玉の雫は落ちて、幽かに黄金の響きを立てる。

（十七）

同じ日の午後も未だ、早蕨座の開場には間のある三時頃、花井は早や楽屋の憂雛がくし、

樂屋中嚴禁の制を犯しで、もう大分に醉うて居る。

『へイ、今日は。』

花井は忙て丶膳の上に延し掛つて這入口を見ると、嵩高な萠黄風呂敷を頭よりも高く背負つた、色の黑い木乃伊のやうに痩せた男がニヤリ〳〵笑つて覗いて居る。

『ヨオ、之は樂天堂主、驚かせやしたせ、其處は端近、まづまづ。』

と上機嫌。

『へ丶丶。イヤ相變らず御盛んですな、まア御免下さいまし。』

此人氣味惡く聲が若い。やつとなと後向に背中の包を下すと、木綿の刺身紋の襦袢の胴も明はに風を入れあから。

『めつきりお暑くなりました。』

『さやうで。早速一杯と言ふ處だが、お前樣は確甘黨だつたね。』

『仰る通りで、此もう歩きの貸本屋なんて者が、左が利いた日には御酒好のお方の處へ商賣にや上れませんでございます。』

『何故ね。』

『否、貴公。一々お相手をしたりさせられたりぢやどうも時間が掛つてゐりません。』

『成程。』

『然し何でございますね、先生は能く夫で舞臺にお差支がございませんなア。』

『へッ、之つぱりの酒に舞臺が勤まらおいやうぢやア、花井大輔も終れりよ、私ア之あつてこそ、却つて面白味が增すんだ。』

『違つたもんでございますね、然し全體は不可ませんのでございませう、當座の樂屋では。』

『ふむ、野暮な事さ、好きな物はお前、幾ら不可ねねつたつて其奴ア無理だアな、尤も賭博の方の規則は皆能く守る、この芝居の樂屋中ばかりは何處探したつて花札は片々も落ちてやしねね、其代りにはだ、時々、彼方此方の室でぶーんど期う腹ん中を抉るやうな、酒の匂ひはしねね事もねねんだ。敢に曰くよ、禁酒するのが人間ならば、蝶蝶蜻蛉も鳥の中つてんだア、ハ丶。』

『へ丶丶驚きましたお。』

この時怖々暖簾口を窺ふ者がある。

『誰だ〳〵。厭な事をするない、用があるなら這入つて來ねね、おや、福山君處の元ちや

んぢやないか、兄さんは最早來たのかい、ふむ早にあ、何か用あんか。』

『あの、』

『うむ何だ。』

『あのねね、本屋さんが來てるやうだから、歸りに寄つてお呉んあさいつて。』

『よし〳〵、たい樂天堂、福山君處のた迎ひだ、先へ行つて來ねね、而して僕の處に、遲くても構はねねから、一番後にして寛々見せて呉んな。』

『畏まりました、夫ぢやずつと廻つて參りませう。』

『さうしねね、さうしねね。包は障碍なら置いてつても構はねねよ。』

『宜しうございますか、夫ぢや何卒お障碍でもお願ひ申しませう。』

言ひながら足に手傳はして片寄せた風呂敷包の中から、部厚な覺ね帳と、外に五六冊小說らしいのを拔き出して手拭に包む。

『何かい、福山君は主に何樣なのを讀むんだい。』

『さやうでございますな、あの方は大抵何時も風葉先生の物をお好みでございます。』

『ふゝむ、オツだな、話せら。まア行つて來給へ、僕の方は成丈遲い方が可いんだ。』

『畏まりました、どうもお迎ひの方御苦勞樣、夫ぢや先生後刻。』

結け樣にお辭義をして漸つと出て行く。

引き違へて暖簾口に立つた人のあるとも知らず、花井は膳の上の德利を倒しまにして、一滴……二滴……三滴目は漸うに滴るのを、常にも似ず氣長にぢつと眺めて我しらず舌鼓ずりをする。

入口に立つたのは外ならぬ加奈村花香、今朝の風俗には引代へた落着き振り、頭さへ伏になきまで氣取つて、心持ち左から兩方へ分けたのを、額へ丸く掛る加減に上へ梳き上げて、左は其儘、右の毛先は燒鏡を掛けて細かく縮らしてある。

ぬつと潛るとずつと通つて、奥の太神宮の掛物を後にむづと座ると、

『早いな。』

と言つた儘直ぐ卷莫を取り出す、花井は不意を打たれて妙な顏、右の手にぶるりと顫を撫でて右手で忙がしく莫盆を出さうとするのを、

『可いよ、可いよ。』

首で留めて膳越しに手を延ばすと、其處の火鉢の火を付けさうにして、ふと心付いた體で

『うむ？又酒かい。』
花井は仕方おく、
『エッヘ。』
加奈村は情けなさうに
『エッヘぢやないよ、酒は不可ん、已も此座へ這入つてからは、あれ程の大酒をふつつりと止めたんぢやよ、已も外の事は多く言はぬけれど、どうも酒の事丈に執念く言ひ度い、如何して貴様には守れんのぢやらう。』
相手の顔は見ずに、此人が舞臺に特色のある沈んだ聲。言ひ終つて靜かに莨を喫す。
『どうも恐れ入つちやつた、實はね君は未だ來やしまいと思つてね……』
『夫が不可ん、來て居らうが居るまいが、止める味に變りはありやせまい、夫も全然ごは言やせんのぢやよ、芝居へ來てる中丈は謹んだ方がよくはおいかと言うてるじや。』
さうだよ、實際さうだよ、實は何なんだ、昨夜は君も知つてる、ね？れ座敷なんだらう。處で少つと飲み過ぎた譯なんだけれ共、家では例の嚴しいお母親なんだからね、今朝十一時過ぎにお目覺の迎ひ酒とは、、、まさかに言ひ得おい、處で一策を案じて、些と早目に出掛け

て斯くの始末なんだ、平にねね、今度ばかしは御目零しを。實際恐れ入つた。』
と口ばかりでは無いらしい。
『それ、見給へお、御母上ぢやて、君の體を案じればこそ嚴くも言ふのぢやらうが、そんお無理をせいでも斷然止たら可えに。』
花井は拜むやうに上げた片手を上——下に振つて、
『止す、もう正に止す。之迄だつて止さうと思つた事は凡五十三回程もあるんだ……實際けれ共矢張り思つた丈おんで……。』
『まア可ね、今日は心持好く遣り給へ、斯うと知つたらもつと遲く來るんぢやつた。』
『否さう言はれると、愈々恐縮するよ、さア最早斯の通り片付ける。』
『まア遣つたら可ねぢやないか。』
『なに最早、丁度お終りなんだから……君もねね、心持を惡くしたかも知れないけれ共、今日の處はまア許して遊んでつて呉れ給へ、實際僕が惡い、何しろ彼んおに誓つたんだからね。』
不審いまでに下手に出て相手の顔を見い見い、莨入を取り出して一服吸ひ付けてポンと

拂く。

『ま、ま、仕方がない。……然しちや、總て此、誓つた事を破ると言ふものは、破られた方は無論ぢやが、破つた方も決して可い心持はしはせんぢやらうがのう？』

『夫や君。』

と二服目を拂いて加奈村の顔を見ると、例の伏目かと思つた眼は、小さきおがらに爛として我が顔を射て居るので一方ならず忙てながらも、

『全く君の言ふ通りさ。』

とは言ふもの丶如何やら奥齒に物の氣色。

『夫でぢやね。』

加奈村は何と思つたか、箕座を直して四角にちやんと座ると、今迄喫んで居た「大和」を右の袂へ入れて、左袂から「チエリー」を出して又氣長に火を付ける。

『夫で？何だい、氣になるぢやないか、早く話し給へお、何か未だ僕が誓ひを破つた事でもあるのか。』

と、とぼけて聞いて見る。

『ま、ま、夫やお前の胸に覺えがあるぢやらう、夫は可えとして、今朝已りや筑波の處で妙な者に逢うた。』

『妙？妙つて、うむ何だ。』

『まア夫も可い、夫から己りや筑波の家で飯を食うた、朝飯をな。』

『ふゝむ？』

『美味がつたお、格別ぢや。』

『へい？』

『恐らく磨ぎ手は婆やではあるまい。』

『へい？』

『己の思ふ處ぢや、十八九、先づ葭町拍子で言はゞ柏屋のかの字處でもあらうか、若い者が爲つた事は味が違ふ。』

『？……』

『然し筑波は食べやせんよ。』

『食べおい？』

『花井！』

馬鹿に聲が大きかつたのでビクリとして上げた顏をうふゝと、笑顏にちらと見て、

『筑波は己の義弟ぢやよ、特別にせい、己や怨むよ。』

言ひ捨てゝ加奈村が立ち上る途端、腰籠をさつと流して飛び込んだ女、息を吐かず泣聲に、

『花井さん、花井、何ぢや大輔、お前さんのお蔭で私や大きお恥をかいたぢやおいか。』

『叱ッ。』

叱つても間に合はぬ、驚いてももう間に合はぬ、加奈村は例の笑つて、

『かの字さん如何したんぢやよ。』

『あら。』

呆れるかの字の顏を見もせず加奈村はぬつと出て行く。

（十八）

筑波の室には最前から小さな御客樣、新橋を問はず、芝居と言つたら何れの座にも響き

渡つた築地なる某割烹店の女將が貰ひ孫で誠吉と言つて色白な眼の鮮明とした十歳ばかり血色の好い口唇の氣凛ッと緊つた、眉長く漆のやうな髪を一分に刈て、縮袢の襟の水淺黄幽かに、井の字絣の伊勢崎に、焦茶地の絹に輪形の絞ある兵兒帶を締めて、一枚限りない筑波の座蒲團に、ちよこなんと座つて膝の上に置いた紫縮緬の小包を兩手でしつかり押へて居る。

その前には、やがて開く序幕を控へながら、悠然として筑波、顏にも掛らず珍らしく笑を含んで嬉しさうに茶を入れて居る。

暫くもぢ〳〵して居た誠吉は、漸ッと口を切つて、

『あの……君の病氣は何んなゝんです。』

『有難う、最早宜しいですよ。』

『さう？ 昨日お祖母樣が富士野さんに聞いたんだつて電話で言つて來たんです、夫から今日土曜日だから遣つて來たんです。』

『さうでしたか、イヤ有難う。』

笑爾して火鉢の藥鑵を取ると、脇を向いて其蓋の灰を吹き、固くなつて急須に湯を注す

ぼうーッと濕つぽく熱い湯氣が手首を纏んで消ゐて行くと、高い茶の黨りが一間に滿つ。

『夫で今夜は築地へ御泊りですか。』

『ね、築地の家は嫌ひあんだけども、晩くなつちや歸れないから仕方が無いのです。君、あの、明日の朝僕と一緒に品川の家へ遊びに來ませんか、電車で直き行けますよ』

筑波は誠吉に茶を出して、

『然し芝居があつちや忙しあいですね。』

『だつて千秋樂になるのは未だなか〳〵なんでせう。』

『さァ……未だ昨日始まつたばかりなんですから暫くはあります。』

『だから明日來ませんか、ね筑波さん。』

『千秋樂になつてから緩々上りませう。』

『屹度ですか。』

『屹度ですとも。』

『品川の家はね、御祖母樣も滅多に來ないから淋しいんですよ、誰も居ませんよ、庭が廣いんです、秋になると御祖母樣が虫を採山買つて逃がすんですよ、秋にも入らつしやいな

富士野さんも築地の家でなけりや筑波さん呼んでも好いつて言つたんですから。ね君、ね

ね？』

『上りますとも。然し、貴君は毎日品川から東京の學校へね通ひなさるのは大變ですねね

ね一人でゝすか。』

『否、幸藏が付いて來るんです、冬あんか雪が降つても休まないの。隨分寒いけれども、

築地の家から通ふよりかも好いと思ふんです。』

『何故ですか。』

『だつて君、[illegible]のやうお老人は構はないけれども、僕

達見たいに之から勉强するものは、築地の家のやうお處へ行つては不可ないんですつて、

富士野さんが言つたんですよ。富士野さんは豪いんですね、獨逸語も讀めますよ、でから

僕は富士野さんと君とが好きなんだ。加奈村さんて人も好きだけれども、僕未だ能く知ら

ないんです。』

誠吉は尙熱心に筑波の顏に目を離さず語り續ける。

『……あの、今年の夏も御祖母樣は伊香保へ連れてくつてますから、君も連れてつて呉れ

つて頼んでも好いでせう。夏のお休みは長いんでせう、ね、入らつしやいな。』
『有難う、上れたら上りませうね。然し僕の家にも小つぽけな妹が居りますから、僕が留守になると淋しがるでせう。』
『あ、其人露ちやんて言ふんでせう、僕れ祖母様に聞いて知つてますよ。その人も連れて行けば好いぢやありませんか、ね君。』
『さうですなア。』
と笑つて筑波は思ひ出したやうに丸くなつて卷煙草を喫す。
『ねえ君、來給ひね。』
『はア、然しまだ夫迄には間がありますから、上れるやうでしたら御返事しませう。』
『ぢや屹度ですよ、僕も夫迄は勉強するんです。』
『然ですな、僕も貧けずに勉強しませう。』
『そしてね、其時は繪を畫いて下いよ。』
『描きませう、下手ですよ。』
『ね、何でも好いんです。』

此時しやぎりの大鼓賑はしく響きて、場内は例の事に開幕を促す柏手の音割れるばかり
今日も早く滿員の好景氣。
誠吉は聽耳を立て、、
『もう開幕んですか。』
『やがて開きませう。』
『夫ぢや僕去かうかしら。』
『まア宜いでせう、今直きに顏をしてしまひますから、さうして一處に階下へ行きませう』
『ね、！でも邪魔になると祖母様に叱られますから。』
『些つとも邪魔になんぞなりやしません、待つて入らつしやい、今僕が鏡臺を此處へ持ち出しますから……君の側で遣りませうね。』
誠吉は嬉しさうにニコ〳〵する、筑波は無造作に鏡臺を引きずり出して、例の辨慶の筒袖をぐつと上へ上げ、兩手に顏を一寸撫つて入口を後に鏡へ向ふ。
『お湯へ這入らないんですか。』
と誠吉は不思議さう。

『ね、今朝這入りました。』
『……富士野さんは隨分た湯が好きですねね。』
『さうですなア。』
筑波は其儘肌を脱かず、眉刷毛を水に浸して二三度頷から顔をぐる〳〵と撫でればもう奇麗に化粧が出來る。
『今日は杉君は居ないんですか。』
『否、加奈村君の處へ手傳ひに行つとりますよ。』
『さう。』
其儘小さい御客様は無言になる、筑波は一寸胸を反らして遠くから顔を寫し、又近づけて藥指の先で眉を撫で、さて墨の筆を取ると僅かに其前後を繕つて、知れぬ程に眼張りを入れると、最後に紅筆を取つて薄く口唇に紅を引く。
『まア此子はちやんと此處に來て座り込んでるのだよ、驚くねね』
賑やかな笑聲を先に這入つて來たのは、誠吉のれ祖母様と呼ぶ女將お國、少し屈みなりの撫で肩の肥つた小女、其實は知らず内見には五十四五かとも見ねる赤ら顔の艶々しい、

髪は根上りの丸髷にして、鼠の袈老お召の單に地味んだオリヴ地に細かい丁字唐草を織り出した單帶を苦しさうに締めて、二つ折にした前の少し横へ紙入を包んで入れた半紙が顔を出してる。
誠吉は不意を食つて仰天顔を上げる、筑波は一寸斜めに鏡を覗く。
『夫では後刻れ迎ひに……。』
送つて來た茶屋の男が會釋して引返すのを、
『あい、御苦勞様と。』
と慰籍つて誠吉の側に座を占める。
『お出でなさい。』
『今日は、もう顔は濟んだんですか、大變手廻しが好いんだね。』
『さうでもありません。』
誠吉はれ國の膝に手を掛けて、
『れ祖母様入らつしやい、大變遲かつたんですねね。』
『はゝゝ之でも遲いの、お前は又餘り早くから邪魔ぢやないかねね、筑波さん、れ前様も

何だよ、此子の言ひなり次第になつてた日にや堪らないよ、誠ちやんた前さんでせう此樣な處へ銳臺を引張り出さしたのは。』

『否誠ちやんでは無いのです、此樣な蝸牛の殼は何處へでも動きます。はゝゝ。』

『戯言ぢや無い、た前さんも餘り書生流過ぎるよ、さア誠ちやん、又來るとして行かうぢやあいか、筑波さんは今度は序幕から出るのだよ、見るでせう？。』

『ねゝ、けれども彼を未だ上げあいんですよ。』

と立ちさうにもせぬ。

『彼？彼つて何さ。』

『……。』

誠吉は默つて膝の包を捻くる。

『ねゝ御免下さいまし。』

と這入つて來たのは頭取、

『ねゝ筑波さん、花束を持つて參りました、此方へ差して參ります。』

『如何もはりですな。』

『如何いたしまして、女將さんも坊つちやんも今日が始めてゞ？さやうでございますか、坊ちやん、筑波さんは、好うございますねね。』

と誰やらの假色を遣つて一ッ坊主頭を振る。

『ホゝゝ、其樣な事をしても通じやしあいよ、夫に此與五郎は素寒貧だもの。』

『エヘゝ、その方が結構でエヘゝ、ま、御綾り！』

と忙しげに出て行く、後を誠吉は煙に卷かれて見送つて居る。

『何時も面白い人ですあ。』

『ほんとにねね。』

『お祖母樣、彼つて之なんです。』

と誠吉は紫の包を出す。

『どれお見せ。』

お國ぼ上から試すやうに握んで見ると、心が柔くて、包紙ががさ〳〵と言ふ。

『あゝ！帶かい？』

『ねゝ！』

と赤くなる、
『夫おら早くさう言へゞ可いのに。』
口で叱つても眼は優しく、
『お祖母様から上げても好いのかい。』
『ね、！』
『夫では……おや〳〵上手く書けたねね、お前さんの御直筆ぢや大したものだ、筑波さん詰らおいもんだけれども誠の志ですよ、自分のとこ揃ひなんですとさ、ほんとにね前さんが最負だよ此子は。』
『如何も困りますなア、こんな事をされては。』
『い、やね、お客様が違ふのだから受けて遣つて下さいよ。』
『さうですか、誠ちやん何うも有難う、早速締めますよ。』
『さア〳〵夫で氣が濟んだ、ね？、又後に來ませう。』
『では君失敬又後に來ますから。』
『さうですか、待つて居りますよ。』

『何うもね邪魔様。』
『失敬しました。』
見返り勝の誠吉を先に、向ふの角迄行つたお國は、何をか思ひ出したやうに、只一人ちよこ〳〵と取つて返して、淋しさうに卷煙草を喫んでる筑波に、
『筑波さん、今日は例のね、奥様が來てるから其積りだよ。』
『ね？』
筑波は胸を打たれて最早顔色が變る。
『なに私が付いてるから大丈夫だ、けれどもねもう此頃ぢや酷く急つてるから、如何工夫して、私を出し抜かおいとも限らないから氣を付けて下さいよ、切角今迄堅くして來たんだから今此處で詰らぬ噂でも立てられたら富士野さんだつて何んなに落膽するか分らおいからね、好ぐざんすか、今日はうつかり誰の口にも乘つちや不可ませんよ。』
『有難う……』
後は咽に詰つて言はれない。
『お祖母様。』

思ひがけず誠吉が耳許に呼ぶので、お國は驚いて振り向けば、何時の間にか病體の加奈村が側に立つて、其腕に高々と誠吉は抱かれて居る、

『まアそんな大きな者が抱かれちや加奈村さんの腕が折れて了ふわね。』

『うふゝ、こんな可愛い孫さんを彼様な處へ置き去りにせられると奪はれて終ふぢやらうが。』

『ほゝ、勘忍してお呉れよ。』

と抱き下して自分の前へ立たせると、お國は戯れらしく兩手で誠吉の兩耳を輕く叩きながら、

『丁度可いから貴君にも御話ししとくけれども今日は例のね……』

『棧敷のぢやらう。』

『御存じ？』

『疾の昔ぢや。』

『さう？ 夫では、彼方側は私が付いてますけれども、此方は味方が無いから何分願ひますよ、若し私に隱して使でも遣して、筑波さんぢや又斷り切れないやうな時にね。』

『可え〳〵安心して居結へさ。』

『夫ちや筑波さんも安心さ、では加奈村さん何分お頼み。』

『お國は如めて誠吉の耳から手を離して、

『ハイ御待ち遠さま。』

誠吉は笑つて、

『可笑かつてよた祖母様、皆の聲がね、びん〳〵びん〳〵聞にて、ちつとも何言つてるか分らないの。』

と今度は自分で遣つて見る、

『さア、今度は本統に行きませう。』

と二人は手を引いて樂しげに去る。

『加奈村君、僕は今日は吃度駄目だよ、彼奴が居つちや落ち付いて舞臺には居られない。』

『意氣地の無い事を言ふあよ、貴様に遜があるから彼んな奴に付き纏はれるのぢや。』

筑波は力なく頸垂れたがやがて、深い吐息を吐く、

（十九）

同座新狂言「新緑」序幕第一場は、面白きピアノの音を聞かして幕を開く、舞臺には正面上、下、三ッ處に長方形の花壇を作り、何れも、初夏の草花麗はしく、其間々好き處には榻を据ゑ、土間の觀客席をも花壇に見立て、兩花道の両側には草花を置いてある、新緑の木の間を透して西洋館を仄見せた背景の手際美しく、ピアノの音は其邊からかと思はれる。

舞臺には何者も居ない、と眼を定めると中空に花の上を行き歸りして大きな黄白の胡蝶が樂しけに舞つて居る、と思ふ程もなく、又もや何處ともなく顯はれた一羽の蝶は、班紋最も麗はしく、宛然其類の王かとも思はれる其羽根を暫く自在に飜へして、つと前なる二羽の間に分け入つたと見れば無慙にも最早白の胡蝶の翼は破れて、哀れや地に蝨いて居る黄なる胡蝶は其儘未練も無げに後なる蝶に戯れて、やがて花にも倦いたか、狂ひ〳〵花道を半迄來た時、恐ろしい唸り聲を先にして揚幕を飛び出した縫包みの大犬は、矢庭に飛び掛つて一時に二羽とも其前足の下に踏へて傲然と構へる、途端にピアノの音がハタと止んで上手奥に、

『あ――ション！』

と魂消るやうな女の聲が聞こえて、ばたばたと走け出したのは當藤浪家の令嬢幸子に扮した淺間巴で、年の頃廿二三、廂髪のS卷に淡紅色大輪の薔薇を挿して、紫がかつたセルの着附に白襦子に土耳其模様の帶を締めて、素足に上靴を突掛けた儘、無造作に両手で掴んだ右の袂を胸に當てゝ息を切らして佇む。殆んど同時に花道から年齢十八九、頭は素の散髪、五分も透かぬハイカラな洋服出立、手に花束を持つて呆れ顔に其無邪氣な眼を見張り乍ら立ち出でたのは、幸の弟同姓緑に扮した筑波正彌、滿場「筑波！」『筑波！』の聲に暫くは白も聞こえず……花束を口に銜へてション の前へ廻つた緑は、突然、ション の前足を捕へて後へ押す、此處へ走け寄つたは幸は活潑に蹲居んで何か言ひながら、袂を上げて蝶を追ふ科、緑はション の頭を撫で乍ら姉の手許を覗と見て居る。やうやく場内靜かに淺間が、

『緑さん。』

と悲しみを帶びて叫んだ聲は流石に女形の上手として見物の胸を打つ。

『ハイ。』

緑は首を心ばかり曲げて姉の顔を見る。
『最早駄目なのよ、可哀さうに……仕方が無い、葬つて遣りませう。』
幸は氣味惡さうに二羽の蝶の亡骸を絹帨の上に載せて立ち上り、
『緑さん入らつしやい、ジョンは來ちや不可ません、ね前は罪人ぢやありませんか。』
調子は少し粘るけれ共優しく、艶なる其眼にジョンを睨んで先に立つ、聽き分けてかジョンは寂しげに頸垂れてるのを、首輪を手に掛けて無理に歩ませ乍ら、緑、
『御姉さん、貴女本當に葬むつて遣るんですか、僕は夫には及ばんと思ふのですがね。』
幸は振り返つて、
『何故緑さん。』
此時二人は舞臺好き處へ立ち止る、
『何故つて御姉さん、僕は今他から歸つて來て彼處で(と揚幕を差し)ジョンと遊んで居たのです、すると彼の蝶々。』
と以前落ちた儘になつてる、上手の白い蝶を指差し、
『彼です、彼の白いのと、其處に持つて入らつしやる黄な蝶とか夫は嘘しげに——御姉さ

んでせう今のピアノは——丁度彼にでも合してるやうに面白く舞つて居たのです處へ其黒い奇魔な蝶が俄かに顯れてから、突然、其立派な翼で彼の蝶を斃して了つたのです、すると其黄なのも憎いぢやありませんか、今迄の交りもあるものを、未練もなげに白いのを捨てゝ其立派なのと舞ひ始めたのです、だから僕は思はずジョンを嗾しかけて見た處が忽ち彼等は白と同じ運命に斃れて了ひました、だから御姉さん、葬つて遣るならば其白いのを葬つて遣つて下さい。』
『ま、夫ぢや此黒い蝶は惡者なのね。』
『人間で言うたらば惡魔でせう。』
『マア厭！』
幸は直ぐに黒いの丈を振ひ落して、
『夫ぢや斯うしませう、此黒いのは憎らしいならジョンにでも何にでも喰べさして了つて、此黄ろいのと彼の白いのとさう二羽を一處に葬けて遣りませう、ね？』
と幸は帶はず上手の白の蝶を取り上げて、正面の花壇の奥へ行かうとする。
『御姉さん夫や不可ません。』

鼻蠢かして捨てられた蝶の方へ行かうとするヂョンを緣は止めて、今度は自分の紛幌に其戸を戴せ、

僕は其黄な蝶のやうに不貞操な者よりも僅かに我が身の美しき翼を此上も無い寶となして、短かい生涯を非業に死した此蝶の方を哀れと思ひます。』

『ホ、、緣さんが又例の意地？貴君最早は白いのを辯むれと被仰つたでせうだから私……』

『夫や言ひました、然し貴女は黄な蝶をも辯むると言ふぢやありませんか。』

『まア緣さんが本氣におつてホ、、何も此様な事如何でも好いやうなものだけれ共、白と黒よりは白と黄の方が似合ふやうに思はれるから、夫で私黒を捨てたばかり、貴君も其様の捨て、了つて入らつしやい。』

『否捨てませんよ、御姉さんが御姉さんで其不貞操極まる奴を最負になさるならば、僕は僕で此蝶を清島さんに寫生して貰つて……』

幸は凛とした聲で、

『緣さん。』

『ハ？』

『貴女今何と被仰つて？』

『僕ば自分の身に若し此蝶のやうな、果敢ない……人で言へば富です、其様言ふ事を頼みにせぬやうに之を寫生して貰つて、自分の戒めにし度と、思ふのです。』

『何方に寫生してた貰ひ遊ばすつて？』

緣は思ひ切つた體にきつぱりと、

『清島淡月君です。』

『清島？淡月！に、貴君はまだ彼の方と交際して居るのですか。』

『交際してたら惡いですか、何故でせう。』

『何故つて貴君、恐ろしい、あの方は肺病ぢやありませんか。』

『ーぇ？肺が何ですか、何で恐ろしいのですか、御姉さん如何して貴女は其様な無情な心になられたのです。』

『に、無情でせうか緣さん、皆貴君の御身を思ふから言ふのですよ、其上此頃では彼の方もめつきり技倆を下げて御丁ひ遊ばして、今時清島と言ふお名前を、畫家として御存じの

方は無い位だのに、何ど思つて御交際をして居るのです、貴君は假にも男爵家の嗣子ぢやありませんか、夫を、あんお落ぶれ果てたしかも恐ろしい病の方と交際つて入らして、若し貴君同じやうな御病氣にでもなつたら如何遊ばすお積なのです、私は最早疾うに彼んな方の事は忘れて入らつしやるとばかり思つて居たのに、現在の姉に隱して……否隱して入らしたぢやありませんか、貴君ど私とは父も母もない只二人の兄弟だのに、其一人の弟にも隔てられたかと思へば、私情なくて情なくて泣き度くなつて了ひます……』

緣も萎れて、

『困るなア僕は、僕は何も御姉さんに隱したと言ふ譯ぢやないのですけれども、何時も御姉さんは、僕が清島の話をすると厭お顏をなさるから言はなかつたのです、夫は御姉さんの氣性ではまだ年も行かぬのに其名を忘れて了はれるやうな人はお嫌ひでせうけれども、彼の貧には窶れ病みほゝけて、病床に横たはつた風を見たならどんな無情な人でも之が當年の清島淡月かと、まだうら若い丈に氣の毒と思はぬ人はありますまい、まして僕ですもの貴女の弟ですもの、御姉さん、淡月君がさうなつたも元はと言へば皆貴女から起つた事ではありませんか僕は一生を賭してもあの人の爲には盡さなければならぬ義務があると

思ひます。』

『緣さん何ど被仰る。』

幸は蝶を戴せた紛帨を花壇の椽に置いた儘、つか〳〵と椽の側へ立ち寄つて其腕を指へ其顏をぢつと見たがふと顏を反向けると、小一の客にさへ聞えぬ程の秘めた地聲で、

『見給へ棧敷の三を、たやすくないぜ。』

囁いたかと思ふと素知らぬ顏できつとある。

『ね？』

我にもあらず筑波は言はれた方をちらと見れば、見渡す彼方電燈の陰に、最前に國が宮で行つた笹川夫人が、見よとや人目も厭はず白麻の紛帨を手先に纏んで、身を延ばしく〳〵と振つて居る、あつと思つたので思はず無意も忘れて立ち竦む處を淡月は浴せかけて、

『如何して清島さんの病氣が私の故ど被仰るのです。』

『筑波は無言に暫の顏を見たまゝ哀れや危く絶句しかゝる。

（二十）

加奈村の室と羽目一重背中合せの一間には、松島と福山とが合室をして居る、二人は今手透と見ねて、狹い室に膝突き合して取り付けの親子丼に舌鼓打ちながら何か小聲に話して居たが、不意に起つた隣室の笑ひ聲に、仰天して思はず箸を止める。

『夫や己にも分つとるよ、自慢しても可え、ま、ま、此後共に宜しく頼む、うふ、。』

斯う言つたのは加奈村の聲で笑つた主らしい。

『實際私ァ驚いたんだ、何しろ之から芝居にならうつて處なんだからね、此處で絶句されたら如何しやうかと思つて手に汗握つたんだ、夫から君――筑波君も仰天したらうよ、飛んでもない處で飛び付いて白を敎へのちん〳〵なんだからねね。』

と、之は序幕に犬の役を買つて出た花井の聲。

『然しまァ可かつたよ。君が居つたればこそぢや感謝する、己も後ろに出て居つてひや〳〵したよ。』

『まして私なんかね側なんだからね、お前さん以上の冷ついた奴さ、たがマァ之で私も些たァお前さんに顏向けも出來やうつてもんさ、全く……昨夜は私が惡かつた、實際彼女、

彼んな我武者らな奴だとは思つて無かつたんだから、今日と言ふ今日愛想が盡きた、尤も今迄交際つた事も無いんだが……。』

『アッハ、、、、ま、其方は最早可にさ、夫よりも淺間君は何と思つて舞臺でそんな事を言うたのぢやらう。』

『夫が君……ね？夫に昨夜出し抜かれた怨もある、に、疾うに知てる、そんな方にや捷しつこいんだからね、夫に昨日私が彼處へ行つた時に、離座敷に正體の知れぬお客が來てたんだ、どうも夫が彼奴ぢやないかと思はれる形跡があるんだ、何でも役者衆だからつてやうな話を小耳に狹んだやうにも思はれる、尤も御相手がお高さんに靜さんと言ふのが奇麗過ぎるんだが……まァ何にしても昨夜の事を知つてるのは確なんだから、詰り夫や之やが纏がらがつて出來上つた仕事あんだらうと思ふんだ、私ァね。』

『ふむ、では淺間は嫌はれた事があるのか。』

『しかも大膽に此方から持ちかけたんださうだ。』

『け、夫、彼のマダムが嫌ふ方かな、夫や淺間の爲に冤罪ぢやらう。』

『否確だつて事だ。』

末の方はやうやく朧氣に聲が薄れて、此方の二人には聞こえなかつたが、序幕の筑波の話をして居たのには、違ひない、松島も物を言はぬ、藤山も黙つてる、た互に舞臺練習の晩の事を思ひ出したのかも知れないけれ共、二人とも淺間を好んでは居らぬ。と言つて別段顔を見合して、頷き合ふでも無い。

花井の聲が又分明と聞こえ出す、

『私ア一體斯う言ふ性分なんで、惡い事だから堪へてしない、善い事ならば無理にもするなんて事は出來ないんだ、何方にしても自分の面白いと思つた方が好いんだ、あに私だつて之で惡人ぢやないからね、だんだん善い事ばかりが面白くあり度いとは心掛けてるのさ全く、だが未だ不可ねね、兎角君に對しても面白あいやうな事が起つてね、まア今の中は免して貰ふさ、之でも君なか〳〵大望があるんだからね、今に見給へ、川上音次郎其處退けつて事業を起して見せる、全くだ、之や戯言ぢや無いんだ、何れ其時は又御相談もするけれど、まア其位の事はする男だらう位には思つて、貰ひ度い、然し今ぢや無い、「今に」なんだよ可いかい、私にや何でも無理にする事は出來ないんだ、だん〳〵と氣を向かしてね？矢張り其性分あんだね、自分で自分の御機嫌を取る奴さ、、、だが舞臺は違ふよ君、

舞臺ぢや私ア手前味噌だけれ共實に聖人なんだ、私だつてお前さん、筑波君には……誰も居ないから話すが昨夜は辱を搔せられたさ、然し夫は私事だ、舞臺では相見互でなくちやならない、夫が芝居の武士道なんだからね、私もまア其の心掛け丈は失はない積だから御贔負樣もあるんだが、何うもまだ不可ない、何卒まア、せい〳〵私事にも左樣なるやうに勤める積あんだから、君丈は花井も存外豪い奴だとは思つて、呉れ給へ、頼むよ。』

『夫や分つとる、然し貴樣ぢやつて豪い俳優になり度いと思ふならば、言ふ迄もあるまいが今些と人格をな、出來る丈高くせにや不可んねね。』

『有難い！君ならばこそ左樣も言つて呉れるのだ、有難い、僕ア全く人格——品格と言つても可んだらう？、其奴が無いのだ、だから、引き受ける役引き受ける役が嫌でも三枚目になつて了ふ、奇態なもんだね、さうなると如何しても其人物迄が三枚目だと思はれて了ふんだ己惚が知れないが情ないねねさう生れついたのが因果なんだが、出來ない願を掛け乍ら死んで了ふのが人間の當然だと思ふと愚痴も洩し度くなるんだ、だが人間ッて者は妙なもんで始めの中は口惜しいと思つた事も、中頃にや無理にも絶念が付いて、終ひにや何時の間にか慣れつこになつて了つて、却つて始めの口惜しかつたのが可笑しくなる事があ

るが、私なんか矢張り其組さ、最初の中はさうでも無かつたのにだん〳〵〳〵我乍ら三枚目におつて行くのが能く分る、然し分るのは年のお蔭なので、分るから分る丈に、時々後へ戻るから今度は道を違へるつて按排にして詰らない堕落はしない積だが、例の面白病で、どうも長直ぐな道へ出られないから情ないんだ、だが君のやうに分明に言つて呉れると、私も骨を惜しまおくなる譯あんだ、人間口先ばかりのと情で言つて呉れるものとは利きやうが全然違ふからね、私も身に染みたよ、之からは一つ心の修業だ、屹度豪くなつて世の爲に盡すから見て〻呉れ給へ。』

『夫では己や面白病平癒の祈禱をするかな。』

『頼まう、たい、笑ひ事ぢやない、アハ〻〻、だがねお君、夫は夫として筑波君は彼から舞臺でも眼に立つて醜いでるのは不可ないね、僕からは言はれないが君一つ言つて遣り給へ此頃目に立つて痩せた處へ持つて〻彼ぢや見物まで引き込まれて淋しくつて不可ない、舞臺は君神聖なんだからね、私事を混て演つちやあらないと思んだ、左様だらうお君？』

『うむ、さうぢや、大分説が豪い、一升買はせらる〻かな。』

『眞面目なんだよ君、戯言にして呉れちや困るよ實際。』

『まア可ね、筑波はそんな男ぢやないわい。』

其前から又食事を綾けた隣室の松島は、丁度此時済んだので、向ふの隅にあるお茶の土瓶を取らうとして思はず、袂が只今井の上へ箸に置いた箸に觸れたので、一本は中へ一本は外へ〻〻〻〻と反ねて、機に井がり〻〻〻〻〻と鳴つた。

『おや、隣室は留守ぢやないのか。』

花井が忙て〻立つらしい氣色なので、福山は急がしく瓦斯を捻る。

『否、留守ぢやらう、恐ろしく暗い。』

と加奈村は入口の方へ首を延べて言つたので其聲が鮮明と聞ゐる。

『さうかい。』

と花井は又座つたらしい樣子おので、此方二人は、薄暗がりに一寸顔を見合したが、直ぐ俯向いて一人は茶を飲む、一人は猶箸を續けたが、間もおく之も茶にして互ひに身動もせぬ、暫し廊下を辷る上草履の音も途絶ねて樂屋には珍らしく寂莫とする。

加奈村の室では夫から二三服灰吹に當てる煙管の音が響いたが軈て一緒に何處へか出て行つた按排。二人はほ〻つとして瓦斯を明るくしたかと思へば、言ひ合したやうに立ち上つ